

札幌国際芸術祭2017の評価

芸術・観光・運営のバランスをどう取るか？

天野 太郎

横浜市民ギャラリーあざみ野 主席学芸員／札幌国際芸術祭コミッティー

総評

今回のSIAF2017は、大友良英ゲストディレクターのもと開催された。ジャンル(アートや音楽など)にとらわれなかった点、ディレクター自らもアーティストとして参画した点、それから札幌市内とはいえ、広域に会場を点在させたことも特徴的だった。何よりもディレクターの存在が全面に押し出された芸術祭は他に類を見ないだろう。大友自身のパフォーマンスをはじめ、mima北海道立三岸好太郎美術館での大友クロニクルの展示も好評だった。そもそも大友氏自身が札幌との縁があったことも幸いした。

また、単に会場が点在していたことだけではなく、何らかの形で展示場所、つまり札幌、あるいは北海道という土地性を意識した作品が多く、鑑賞者が街巡りをすると同時に、そうした作品の背景を知ることで場を意識することができた点は特筆されて良いだろう。ことさら世界的な視野に立つのではなく、表現者と場とのリアリティが鑑賞者と共有できた点も評価されるべきだろう。数年前であればこうした傾向は、ローカル性として決して肯定的には評価されなかったが、世界の枠組みが破綻して以降、民族やその住まう地の単位がかろうじて価値を共有できる最小単位になった現在、意義ある構成だったと思われる。

改めてSIAFの特徴でもあり、同時に欠点でもある主会場を持てないことについて指摘しておきたい。これは、同芸術祭開催前から筆者より指摘してきた課題で、収入面(愛知や横浜のように主会場をまず見るために入場券を買わざるを得ない)に深刻な問題を抱えること、会場の分散化が鑑賞者の移動に負担をかけることなどが挙げられる。一方で、こうしたネガティブな点を除けば、否応なく市内を移動せざるを得ないことからとりわけ道外の鑑賞者にとってはこれまで知ることができなかった札幌や北海道についての発見を得る機会が増える点は評価すべきだろう。実際に、主会場を抱える国際展は、主会場の入場者の60～70%が他会場へ移動していることが判明していることから、良くも悪くも主会場で満足してしまう傾向がある。また自治体にとってこういった国際展の役割の一つに観光資源になり得るかどうかが、あるいは機能しているかどうかが大きな関心となっている。こうした点に立てば、さまざまな会場を周遊せざるを得ない状況は逆手に取れば周遊観光へとつながる利点でもある。

会場構成、作品など

屋外作品(前回の札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)や島袋道浩氏の石、札幌市資料館裏のコロガル公園など)が少なかった代わりに屋内、それも日頃足を踏み込むことのない場が選ばれたのは、スペクタル感に乏しかったとはいえ、場と作品を合わせた新たな発見ができた。札幌市立大学は、清家清建築が堪能でき、かつ場を巧みに活用した毛利悠子作品、さわひらきのHUG、クワクボリョウタのCAI02、円山動物園の展示も広い意味でサイト・スペシフィックな作品として好評だった。HUGとサップロファクトリー、OYOYOとスープカレー店、すすきの展示など、とりわけ道外からの参加者にとって美術と食の接近は良かった、という意見多し。

広報面

ガイドブックに各会場の住所がなかった(地図のみ)。地図も読みづらい。地上でビルを探すのが分かりにくい。一方で、地下鉄改札を出たあとの地上地図には、乗降口番号もあり分かりやすく、市営地下鉄の協力が大きい。駅での露出度やデジタルサイネージ、チ・カ・ホなどで目立っていた。これは、市電のラッピングなどに芸術祭カラーを効果的に示した。

会場時間

時間帯が複数あることをどう伝えるか。時間差で時間を無駄にせず作品を見て回ることができるという点、会社帰りに見られるなど、の利点を生かすべき。

スタンプラリー

全部見てみようという気になり、札幌市内を回遊するのは、スタンプラリー好きには好評だった。会期中に発生した台風18号の影響で、公共施設(大学含む)や屋外が展示中止になったが、その案内を札幌駅にあるインフォやホームページ、SNSを通じて告知した対応は良かった。

受付、監視

有償アルバイトが受付などをしていたということで対応はとても丁寧であったという感想が多く聞けた。事例として、チケットを落として次の展示へ行ったとき一つ前の展示の場所に連絡して確認してくれるなどテキパキとした対応で非常に好感を持ちました、という声あり。

パンフレット

構成が見にくかった、という指摘が多かった。後改訂されたものの、当初、場所の住所が入っていなかったのは地元住民ですら不便を感じたという意見が多かった。紙媒体では止むを得ないが、期間限定展示やイベントが終わっているのが一緒になっていることで、情報の混線があったようだ。少なくともホームページなどで情報のアップデートを見やすい形で紹介する必要があると感じた。

移動手段

モエレ沼公園と札幌芸術の森以外は、えきチャリさっぽろは有効な手段であったようだ。朝6時から24時まで借りて500円というのも良かった。借りている外国の方が多く、受付の対応は好評であったと聞くことが多かった。

次回開催に向けてのアドバイス

今後の開催時期について、8月スタートは夏休み時期と重なり、宿も高い。一方で、シェアハウス、Airbnbなど使った旅にできれば家族でゆっくり来たいという意見が多く聞かれた。宿泊施設のインフラづくりが急がれる。また、開催時期の冬の可能性についてであるが、広域の展示が見込まれる中、雪に不慣れな道外の観客にとっては負担が大きいと思われる。長期の夏休み中の、これからますます増加するインバウンドの観光客も含めた取り込みは当分継続すべきと考える。

また、既述したが、主会場のないことを利点として大いに生かすことが次回展への大きな枠組みと考える。これは一方で、運営に大きな負担をかけること、また作家の選定、展示といったキュレトリアルな側面をより強化する必要を迫られる。これもすでに何度も事務局に提案してきた点であるが、事務局を札幌市芸術文化財団に移管し、継続的な組織づくりに着手すべきである。事務局長など市とのパイプ役には市役所からの人材が必要であるが、上記のような人的な育成を行うにはこの手段しか見当たらない。早期の着手が望まれる。

典型化された美術の規範の狭小さを打ち破る芸術祭

飯田 志保子

インディペンデント・キュレーター／東京藝術大学 准教授／SIAF2014アソシエイト・キュレーター／札幌国際芸術祭コミッティー

評価できる点

音楽と美術の領域を融合した実践を行うアーティストの参加と、さまざまな市民参加事業によって、大友ゲストディレクターのSIAF2017に対するヴィジョンと指針が明確に表現されたこと。芸術監督制を敷く上で最も肝心なのは、監督の声が市民、来場者、ステークホルダーに対して明確に伝わることである。徹頭徹尾「市民のための芸術祭」にしようとした姿勢と、良い意味でアーティスト選定に偏りがあったことが、SIAF2017の特性を強調した。視覚芸術よりも、視聴覚ならびに身体表現を伴った全身で体感する作品、ワークショップ形式で一過性ではない深い参加経験を得られるプロジェクトが多くを占め、典型化された美術の規範の狭小さを打ち破る芸術祭となった。また、鑑賞/体感/参加する作品のみならず、札幌の文化史を個人の視点で語り直す主観的なアーカイヴ展示もいくつかバランスよく組み込まれ、芸術祭という大きな枠組みを借りながら、そのアジェンダに対するアンチテーゼやオルタナティブであろうとするゲストディレクターの一貫した姿勢が強く前景化された。こうした挑戦的な試みを可能にしたのは、ひとえに各作品のクオリティの高さと、それを実現したスタッフの尽力である。さらに、街中の雑居ビルや市内の建物におけるサイト・スペシフィックな展示が増えたことで、美術館や資料館といった文化施設内の展示との対比が際立ち、芸術祭としての奥行きが増したことも評価される。SIAF2014でも会場の一つであったモエレ沼公園をコンセプトの中核に据えたことで、札幌市内広域の魅力のアピールや観光資源紹介に貢献した。SIAF2014での経験と反省点が生かされ、十分に達成できなかった市民参加を飛躍させられたのは今回最も重要な評価点である。デザインも機能性・可読性ともに高く、効果的であった。

改善すべき点

上記の評価点を逆の視点から見たものが改善点となるだろう。コンセプトの「ガラクタの星座たち」に対し、星を表象する各作品の質は高かったものの、芸術祭全体として星座を体現しきれていなかった点。芸術祭としては総合的に評価できるが、今後SIAFが国際展を目指すのであれば、美術展としての見応えもさらに求めたい。会場数とイベント数の多さは評価点・改善点のどちらにもなるが、それらがキュレーションされた展覧会なしに市内に多数点在することは散逸感を招く。会期中を通して動きや変化が起こり続けることは望ましい一方、多数の小さなイベントは、固定ファン以外はフォローしきれないため、映画祭のように短期集中型で大小の事業を集約させるか、あるいは中核をなす固定の主催場の展覧会のボリュームを増すなど、今後の検討課題の一つである。また運営面においても、事務局の規模と人材に見合った事業数と組織体制への改善が求められる。国際性については、今回札幌市民のSIAFの認知と参加意識は向上したと思われるが、少なくとも現代美術領域における国際的な認知度は向上していないため、今後SIAFが国際性をどのくらい重要視するかに応じて検討が要される。場合によっては市の基本構想にメスを入れ、「札幌芸術祭」に舵を切る大転換を図ることも検討する意義があるかもしれない。

次回開催に向けての

アドバイス

～「独自性」と「継続性」の観点から

SIAF2017で達成されたのは独自性である。芸術祭が乱立するなかで独自性を打ち出すのは極めて難しいことであるから、今回を一つの成功モデルとし、次回以降も美術専門家ではないゲストディレクターを選定していくことを試みても良いかもしれない。ただし、美術専門家以外のゲストディレクターの起用については美術関係者から批判の声も少なくないため、美術専門家とそれ以外の共同ディレクター制も一考の余地がある。運営に関しては、事業数と会場数を減らし、SIAFの持続可能性を担保するべきである。ゲストディレクターの熱意とコミットメントは何より重要だが、主催者の規模を鑑み、事業の枠組みは事務局でしっかり手綱を握るべきではないだろうか。

自由意見

SIAFは国内では数少ないボトムアップで創始された芸術祭であることに立ち返ると、改めて「市民」と「同時代の美術」の要素が重要であると思う。この二大要素は、事業主体や予算規模に抛らず、芸術祭を行う意思と展望があるところではどこでも実現されることが、世界の多様なビエンナーレにおいても確認できる。札幌の場合、1970年代から地元の現代美術家が手弁当で国際交流を含む先行事業を行ってきた実績もあるため、行政としてサポートすべきは「市民」と「同時代の美術」を持続可能にする枠組み(＝芸術祭)を作ること、そして特に個人では継続が難しい「国際」の部分に注力すべきではないかと思う。上記の「改善点」では「札幌芸術祭」への大転換も一案として提案したが、「今後SIAFが国際性をどのくらい重要視するか」という点で、原点に立ち返り、「国際芸術祭」としての発展を探索してもらいたいと私は考える。それが札幌で芸術祭を創始した理由の一つではなかっただろうか。

芸術祭を育てる、ということーさらなる広がりに向けて

熊倉 純子

東京藝術大学教授(音楽環境創造科・大学院国際芸術創造研究科)

展示はおおむね見る事ができたように思いますが、その中で特に見応えがあったのが、毛利悠子・堀尾寛太・梅田哲也の3人の作品です。レジデンスの成果が功を奏し、時間をかけて構想し作り込まれたインスタレーションは、遠方からの来場者をも「旅のかいがあった」と満足させてくれる充実したものでした。モエレ沼公園の展示も、招待作家たちの作品の中に大友作品が散りばめられ、招待作家たちの作品群をつなげるアクセントとして機能しているようでもあり、はたまた大友さんが招待作家たちを包み込んで迎えているようもあり、展示室から展示室へとわくわくする回遊体験を提供していたと思います。札幌芸術の森美術館の展覧会はシンプルなコンセプトですが、音楽と現代美術の接点を示した点で、札幌の音楽好きの若者たちに大きな示唆を与えてくれたのではないのでしょうか?前回の北海道立近代美術館や札幌芸術の森、北海道庁赤れんが庁舎などのずっしりと重く深い展示とは趣を異にして、軽やかでシンプルな構成が今年の特徴なのかなと感じました。

しかし、展示もさることながら、ミュージシャンである大友さんの真骨頂は、数々のライブ・パフォーマンス企画に表れていた可能性もあります。特に、街中に解き放たれた若手ミュージシャンたちと遭遇できたら、きっと忘れえぬ体験となったと思います。また、大友さんの人脈で、札幌に長く脈々と受け継がれていたマイナーな音楽系の活動に光が当てられたことも、歴史的に大きな意味があったはずです。残念ながら、私自身は短い滞在の中、効率よく(日本文化政策学会の)バスツアーで展示を回った反面、公演系のプログラムはまったく見る事が叶わず、札幌在住の方々がうらやましく感じました。遠方から訪れる、いわゆる芸術祭とは展示がメインと思い込んでいる観客には、今回の芸術祭の貴重な妙を味わうことは難しかったのかもしれない。

転じて、運営系はどうだったのでしょうか?前回同様、SIAF運営チームの密なチームワークが随所に感じられました。ディレクターである大友さんの哲学と「ビッグバンドのような運営チーム」というフラットな運営方針は、今後の日本の芸術祭にとって重要な示唆に富むものです。ぜひとも今後も札幌にその哲学が根付いていくことを望みます。札幌市役所の事務局もー大友さんには、きっと何度も叱られたと思いますがー前回同様、全国有数の熱意と柔軟性で取り組まれているように拝察いたしました。

ただ、一点懸念を抱いたのは、準備期間を含めて札幌市内の芸術関係者の反応が薄かったことです。「いま、なにがどうなっているのか、まったく見えない」という声をよく耳にしました。「市役所による、市役所の芸術祭」などというふうに、思われてはいないでしょうか?財団、大学、NPOやアーティストたちなど、皆さんがもっと芸術祭に参画をして、オール札幌で汗をかいて楽しみ、皆が成長する機会になると、より素晴らしいと思います。毎回、ディレクターも事務局担当者たちも変わるシステムで、芸術祭をどう成長させていくのか?前回の評価報告書にも書かせていただきましたが、鍵となるのは地元の芸術関係者が受け皿としての能力を高め、毎回の経験を継続・発展させることに尽きると思います。次回の運営面での盛り上がりにはさらなる期待をしております。

資源の選択と集中でよりいっそう賑わいの創出を

樽見 弘紀

北海学園大学法学部教授(非営利組織論・芸術文化政策論)／
安田侃彫刻美術館アルテピアツツァ美唄理事(兼 運営委員)

評価できる点

- ・実行委員会と市役所の担当部局連携による周到な準備と実施体制は、トリエンナーレ形式開催であることの利点をいかんなく発揮している。
- ・名声・実績・能力、いずれにも優れた総合ディレクター(前回の坂本龍一氏、今回の大友良英氏)をつかまえ得ている。
- ・芸術祭の一連のフェーズ(起案、計画、実行、評価等々)において、歴代の首長(上田前市長、秋元現市長)が十全にリーダーシップを発揮している。
- ・都市インフラを活用した、意欲的かつ実験的な企画展示も少なくない。
※SIAF2017における路面電車利用のパフォーマンスなどはとても興味深かった。
- ・とまれ、トリエンナーレの「2回目」を見事、やり遂げたその事実!

改善すべき点

現在の拡散型 / 分散型開催方式から圧縮型 / 稠密型開催方式への転換(提案1)

南区の札幌芸術の森と東区のモエレ沼公園とではいかにも遠隔に過ぎる。札幌駅前通 / 札幌駅前通地下歩行空間(チ・カ・ホ)をウェルカムゲートと規定することには大いに賛同するが、残念ながら、期間中、その基幹たる「ゲート」からして賑わいが感じられなかった。自治体施設としての札幌芸術の森エリア(札幌市立大学を含む)やモエレ沼公園エリアなどを大事にしたい市役所の気持ちはある程度理解するが、ここは「資源(ヒト・カネ・モノ・情報など)の選択と集中」および「芸術祭の賑わい創出」にもっと大胆に舵を切るべきである。いっそ「芸術祭は都心」のみを言い、「周縁は関連イベント」とする、と割り切ってみてはどうか。

芸術祭開催期間中の路面電車・ベロタクシー・シェアサイクルなど、重層的な地上移動手段の十全な活用(提案2)

前述の「都心の芸術祭」の「賑わい」をより効果的に演出するためには、参加者が効率的かつダイナミックに地上を平行移動する(できる)必要がある。地下鉄やバスもちろん一定の役割を担うが、ループ化なった路面電車や、ドイツ起源のベロタクシー(人力タクシー)、中国からの進出を果たしたモバイク(シェアサイクル)など、ここへ来て面白い展開・充実をみせている札幌の多様な地上移動手段網を重層的に活用しない手はない。人々の「呼吸するように街をめぐる」の実現に注力すべき。期間中、物理的にも、金銭的にも、また、心理的にも地上移動手段の選択肢を増やすこと、また異なる交通手段相互の連関を図ることが、そのまま芸術祭の魅力を増し、また、魅力に満ちた札幌の都市景観を世界に発信することにもつながるものと思う。

次回開催に向けての アドバイス (「自由意見」を含む)

ハコは街にある

(前回、今回の2回の芸術祭ですでにその端緒は開かれているが)既存の美術館や公共施設といった、いわゆるハコモノに固執しない芸術祭の「新しいハコ」の在り方の発見に向けた、発想の転換とアイデア出しをさらに加速すべき。とりわけ、商業ビル、ホテル、学校、カフェ、商店、商店街、民家、民家の蔵などの活用方法をもっと発見・発掘したい。
※規模ははるかに小さいが、例えば、神奈川県の葉山芸術祭などはアイデアの宝庫としてとても参考になると思われる。

肝はカネになる

芸術祭隆盛のカギは、その実、作品取引のショーケース機能にある(と僕は信じて疑わない)。税金由来の自治体予算(＝他人のカネ)で、企画(＝魅力)を広告代理店や総合ディレクター(＝他人のちから)に丸投げするのではなく、早く市民ベースのみならず経済ベースでも「自発する芸術祭」

たり得るフェーズに上がるべき。世界の名だたる芸術祭では、実は、裏で、あるいは周縁で暗躍する(?)キュレーターや画廊や画商の情報交換活動や、場合によってはリアルな商取引が重要であることは一定程度常識であると思う。同時に、芸術祭開催期間中、ホテルや商業施設などが経済的に潤った、という成功体験もあなどれない。短期的に、あるいは中長期的に「SIAFはカネが動く」も、実は大切な到達目標ではないだろうか。

とはいえヒトが真ん中

さはさりながら、前提条件としてベネッセも安藤忠雄も持たないSIAFにとって、やはりボトムアップの市民力に勝る原動力はない。とはいえ、「市民」はともすると「烏合の衆」の別称でもある。どのような市民、市民力を必要としているか、を精査することが肝要かと思う。以下、瀬戸内国際芸術祭との対比で、求められる市民像を列記してみたいと思う。

前提条件(まちそのものの魅力)

瀬戸内:何もないところに芸術祭のアイデアが降臨→自発する「こえび隊」などの市民力(当然と言えば当然)
 札幌:一通り何でもあるまちに降って湧いた芸術祭＝さまざまな都市の魅力のone of them →市民は忙しいので市役所任せ(当然と言えば当然)

旅の起点としての芸術祭 vs. 旅の終点としての芸術祭

瀬戸内:狭い、何もない島々に芸術祭を「目的(終点)」とする人々が集中する→外形的には成功。その実、不平不満は潜在的にある→芸術祭訪問のフェス的成功
 札幌:広い、都市機能も整った街の芸術祭を「理由の一つ(起点)」に人々がまちに散在する→外形的には失敗。その実、旅の満足度はある程度確保される→芸術祭訪問の総花的成功
 【芸術祭単体としての評価は、フェス的成功>総花的成功、となりがち?】

SIAFの真ん中たる市民/市民力像

- 市民の代表たる「市長」のもっと顔の見える芸術祭:例えば、海外の芸術祭(パリなど)では、市長招聘作家として世界各地から、未だあまり光の当たっていない作家の「個展」などが開催される。「市長招聘」をSIAFの一つの目玉企画に仕立てられないか。
- 「心の札幌市民」も参加できる芸術祭:札幌は冬季オリンピック(1972年)やビール、ラーメンなどを通して日本有数の国際ブランド力を持つ都市である。札幌に住まわずとも、札幌を愛し、いつか札幌への旅行/移住などを祈念する人々を「心の札幌市民」として遇するSIAFへの特別参加のかたちを工夫したい。
- 世界中の作家や作品が活発に売り買いされる芸術祭:アート作品は室内装飾の身近なアイテムとして、あるいは割のいい(?)投資/投機の対象としてかつてない裾野の広がりを見せる。SIAF開催期間中に全国/全世界のアートの売り手と買い手がプロ・アマを問わず札幌に集結する、というシーン、すなわちショーケースの賑わいを創出したい。
- マイノリティーのための芸術祭:アールブリュットや先住民アートなど、既成概念に捉われない新しいアートの発信地機能を強化できないか。
- 多言語・マルチメディアで同時発信される芸術祭:海外の芸術祭に比して、とかく多言語性や同時性の面で遅れの目立つ日本の芸術祭の常を超克するなんらかの方法論を手にすることで、国内でも突出した国際性をもつ芸術祭となりたい。

まずは芸術祭の面白さを市民に体感させて

藤田 直哉

文芸批評家

――

評価できる点

他の芸術祭と比較し、音楽やノイズなど、異なったテーマを持ってきたところは評価に値する。木彫りの熊などの民芸品に着目した展示も良かった。「ゴミ」など、一見したところネガティブに捉えられかねないテーマを持ってきたところも良い。メディアアートを全面に出す創造都市であり、同時に自然で知られる北海道であるので、そこを推し出す点も悪くはないと思う。作品で良かったのは、中心市街の作品群。なかなか普段見れないような建物を大胆に使い、現代美術が一気に見られる構成になっていたのは良かった。

――

改善すべき点

全体的に、盛り上がっていない。集客に問題がある。地元の人々の当事者意識も低い。それは、札幌の文化的な土壌の問題もあるのかもしれないが、越後妻有や瀬戸内のような、地域を巻き込んだ芸術祭の作り方に比べると寂しい(旅行者は、住人との触れ合いも楽しむものである)。地域への影響や効果も薄いのではないか。これも北海道特有の問題だと思われるが、あらゆるものが遠くて交通の便が悪い。札幌芸術の森とモエレ沼公園は、それぞれに素晴らしい場所なんだけれど、中心部からのアクセスが悪い。観光する人は、普段と違う景色に触れる楽しみも期待するのだけれど、途中の風景も特異なものではないのが、退屈さを生んでいる。市電を作品にしたように、移動のバスも作品化したり、映像を見せたりで楽しませることもできるのではないか。さらに、展示のボリュームがそれぞれに少ないので、不満足感がある。例えば、モエレ沼公園をもっと全体的に使って、今の20倍ぐらいの作品があっても良かったのではないか(若い地元のアーティストや学生らに参加してもらって)。残念ながら観光としてのデザインが悪いとしか言えない。

――

次回開催に向けてのアドバイス

SIAF2017のテーマや内容自体は意欲的だったが、しかし、ノイズや星座のような主題は、少し高度ではないか。実はそこにないうでいて耳を澄ませばある、という「ノイズ」の鑑賞方法は、むしろ通常のスペクタクルな芸術に対する反省や批評として存在するのであって、そもそもスペクタクル的な「現代美術」それ自体の経験があまり豊かではない札幌は、それが機能する手前にあるのではないだろうか。まずは派手で直観的な現代美術で圧倒して市民を芸術に巻き込む方が先では。歴史や伝統がある地域と比べて、北海道は不利な点もあるし、有利な点もある。やはり、伝統的な地域では地域資源が多いし、住民の積極的な意識なり社会関係資本なりがある。その点では明らかに不利なのだけれど、新しい設計都市であることを生かしたり、近代(開拓)に固有の問題系が集約されているという点では、面白い場所でもある。炭鉱(エネルギー開発)やアイヌの虐殺など、一見負に見えるテーマであっても、世界的な潮流としては、むしろ取り上げるべき題材とされていることが多い。それらの「近代」の問題系を問うことで、北海道・札幌という特異な地域固有の歴史を提示し、そのことによって全世界のさまざまな「近代」の問題を抱えている地域と連帯し、連携できるのではないか。むしろそれこそが、日本の芸術祭や地域アートのブームによって食傷気味の観客に対し、アピールする新機軸になるのではないか(他がやらないテーマに意欲的に取り組み、なおかつ、そこでしかできないことをやっているものは、わざわざ観に行く価値があるものと観客は感じるはずだ)。

――

自由意見

「札幌」という枠組みを超えてもいいのではないか。例えば、新千歳空港ではいろいろな展示ができそうである。初音ミクのシアターなども使える。「自然」をテーマにするのなら、残念ながら札幌の市街地はあまり向いていない。もっとむき出しで雄大な自然が、例えば「青の洞窟」などで見れる。北海道に来る観光客が見たいのは、普段見られない「自然」ではないのか。崇高な自然美に触れたいのではないか。富良野の花畑や、洞爺湖の地形などが見たいのではないのか。そ

れを支援するような芸術のあり方―人工と自然を対立させるのではない、芸術のあり方―も可能ではないのだろうか。国東半島芸術祭は、そのようにむしろ自然を推していた。

初音ミクなどや、コンピューター産業のような民間企業がもっと積極的に参加しても良いのではないか。特に、メディアアートを推すのなら、民間の企業の力が必要である。例えば、ハドソンやデービーソフトなど、歴史的なファミコンの会社も存在していたわけであるから、その辺りを再評価したり、むしろ積極的に提示することで、全国各地のゲームファン達にアピールできるのでは(『美術手帖』2017年12月号で、現代の美術のキーワードに「ゲーム」が入っていた)。芸術ファンだけを当て込むのでは、芸術ファンすら見向きもしない。むしろ、芸術の輪郭を改変し、拡張していく創造性こそ、目の肥えた美術ファンを振り向かせるし、芸術に興味のなかった多くの人々を巻き込んでいくことになるはずである。

従来の美術の文脈から離れ、SIAFの独自性を深化させた画期的芸術祭

細田 成嗣

ライター

評価できる点

何よりもまず、普段あまり大々的に取り上げられることの少ない、先端的な表現活動を行っているアーティストたちに、スポットライトを当てる場が提供されていたことが多いに評価できる(例:堀尾寛太、梅田哲也、また「ノイズ電車」に参加した面々など。一部では評価されているものの、未だ世間的には正当な扱いを受けていないアーティストたち)。同時に、それが「芸術のための芸術」へと自閉することなく、美術の文脈を専門的に学んだわけではない人たち、とりわけ家族連れや子供たちにとっても端的に楽しめるイベントになっていたことも評価できる(例:子供たちも自由に出入りできる《(with)without records》、探検心をくすぐる《点音》のマップ、スペクタクル的な要素もある《ドッカイドー／・海・》など)。これらの展示作品を手がけたりパフォーマンスを行ったりしたアーティストたちには、普段美術家ではなく音楽家として活動している者も多く、芸術祭全体が従来の美術の文脈には収まりきることのないものとなっていた。そこに本芸術祭ならではの独自性が打ち出されていたように思う。また、本芸術祭ではインターネット上のSNSなどを情報発信の場に活用していた。ほとんどの展示作品は写真撮影可能であり、そしてその展示作品もいわゆる「インスタ映え」する要素があったことなどから、来場者同士によるSNS上での口コミ的な情報の広がりが見られた。こうした側面も時代の情報環境に即した広報戦略として評価できる。

改善すべき点

複数の展示会場が広範囲に点在しているため、短期間しか滞在しない観光客は全てを見ることができず、そのうちのいくつかを選ばなければならなかった。この「捉えきれなさ」自体は良い(「SIAF2017バンドメンバー」の一人である藪前知子が『webちくま』での連載記事「ひとつの芸術祭の終わりに」の中で述べていたように、公的助成金を使用する「まちおこし」の一環として行われる国際芸術祭において、リスク回避と綿密な計画性ばかりが重視されることによって、アーティスト自身が初めに抱いていたはずの動機が薄れゆく傾向が強い他の芸術祭に比して、むしろこの「動機」を前面に出した本芸術祭の功績は非常に大きいと言える)ものの、それによって、こうした観光客にとっては、それぞれまったく異なる会場巡りを行うというよりも、むしろ主要スポット(モエレ沼公園、札幌芸術の森など)にばかり行き先が集中してしまい、体験のバリエーションが狭まってしまっていたように見受けられた。また、本芸術祭の基本構想には「札幌らしいアート・シーンの活性化を図る」という目的があるものの、今回の芸術祭に限って言えば、ゲストディレクターである大友良英の周辺のアーティストの作品の印象が強く、少なくとも筆者は札幌市から独自のアート・シーンを感じ取ることができなかった。確かに札幌という地政学的条件や都市の景観を活かした作品、札幌の歴史を掘り起こした展示物、その場所できかなし得ない展示作品やライブ・パフォーマンスなどはあった。すなわち都市全体としての札幌の魅力を感じることはできたものの、そこに息づくアーティストの魅力があまり前面に出てくることがないように思えたのである。これはおそらく、先に述べた「体験の逆説的な画一化」によって見えなくなってしまうところもあるように思われる。

次回開催に向けてのアドバイス

音楽家が芸術祭のゲストディレクターを務めるということ、「サウンド・アート」という美術の文脈とも異なる「音楽と美術のあいだ」ともいうべきユニークな芸術祭であることが、SIAF2017の特徴的な側面だと言える。そのためこうした特徴が継続していくことが望まれる。また、それによってどのような「新しさ」を獲得しているのかということも、より多角的な視点から検討されるべきである。例えば今回であれば、アート系の雑誌だけでなく、より多くの音楽雑誌に「音楽フェスティバル」として取り上げられても良かったように思う。次回ではこうしたさまざまなメディアとの連携が望まれる。また、次回は東京オリンピックと同時期に開催される予定のため、「創造都市さっぽろ」の魅力

を今回以上に打ち出していくが必要になると思われる。例えば、今回の芸術祭では展示やパフォーマンスだけでなく、長い時間をかけなければその成果が出てこないようなワークショップ・イベントも複数開催されていた。そうしたイベント参加者たちが3年後にどのような成果を見せるのか、こうした側面を次回の芸術祭と連関させていくことが期待される。それにより、札幌に息づく現在のアート・シーンの独自性が、よりクリアな形で来場者に伝わるような芸術祭となることだろう。

自由意見

筆者はあくまでも芸術祭を目的に、さらに人生で初めて訪札した観光客でもあったため、展示作品やライブ・パフォーマンスを堪能するとともに、札幌という都市の魅力も知ることができた。しかしながらSIAF2017では、その「捉えきれなさ」も手伝って、札幌市民と短期間しか滞在しない観光客との間で、その体験が大きく異なるものになっていたように思う。より具体的に腑分けすると、気軽に足を運べる札幌市在住者、少し時間をかければ訪札できる札幌市近郊の住民、会期中ほぼ一度しか訪れることのない観光客という分けができる。加えてここには、芸術祭を目的に訪札する人たちと、別の目的で訪札したところ偶然にも芸術祭に出会うことになった人たちがいる(下図参照)。

これらそれぞれのブロックで芸術祭の体験の異なりが見られるように思われる。今回の芸術祭では、「捉えきれなさ」によってそれぞれの異なる体験が、必ずしも序列化されることのない等価なものとしてもたらされていた。ただしSNS上での情報戦略は、芸術祭を鑑賞することを目的に訪問した来場者には有用だが、たまたま訪れた近郊住民および観光客や、イベントをフォローしているわけではない札幌市民に対しては、やや効果に疑問の残るところがある。おそらく来場者の大半を占めるのは札幌市民および都市近郊の住民であるため、ここに向けた情報戦略により注力することが必要になるだろう。こうしたブロックそれぞれに適した情報戦略が望まれるとともに、同ブロック内部での体験の多様性を確保していくことによって、「体験の逆説的な画一化」を回避していくことも必要になるように思われる。

	札幌市民	札幌市近郊住民	観光客
芸術祭が目的	日常生活と密接に関わる中で芸術祭と接する。毎日接する機会がある。	日常生活の範囲内で芸術祭を鑑賞しに出かける。複数回接する機会がある。	芸術祭を鑑賞するために非日常的な時間を費やす。接する機会はほぼ一度きりしかない。
別の目的	芸術祭を知らない／興味がない札幌市民。時間をかけることで認知させる／興味を抱かせることが可能。	何らかの目的で札幌市を訪れた近郊住民。初めの印象によっては、複数回足を運んでもらえる可能性もある。	何らかの目的で札幌市を訪れた観光客。印象が良かろうが悪かろうが、繰り返し足を運ぶ可能性は非常に少ない。

他の機会では得難い思い切った方針と、作品を楽しむことを助ける工夫の必要性

吉崎 元章

札幌市芸術文化財団総務課課長職／一般財団法人地域創造派遣／札幌国際芸術祭コミッティー

評価できる点

音楽家であるゲストディレクターの個性が色濃く表れ、テーマへの一貫性が全体を通してみられたことが、他の芸術祭とは異なる特徴を生んでいた。札幌市民にとっても、これまで紹介されることが少なかった表現や、北海道にありながらもほとんど顧みられなかった事物に芸術的視点からスポットが当てられたことで、新たな刺激を得る機会になったと思われる。また、企画チームに地元からも多く加えたことや、広くプロジェクトを募り正式プログラムにしたこと、コンサートや演劇などへの市民参加の機会や大風呂敷プロジェクトでボランティアの活動の場をつくったことなど、前回とは異なり、強く地元を意識し、市民を巻き込もうとする意図が感じられた。この地で長く活動してきた中から発案された企画の数々には、ローカルな話題にとどまらない確かな強度があった。さらに、ゲストディレクターが会期中のほとんどを札幌に滞在し、さまざまなイベントに登場したことが芸術祭全体のまとまり感と市民への親近感を生み、突発的なものを含め、各所でイベントを多発させることで祝祭的な盛り上がりがある程度演出できていたと思う。

改善すべき点

多くの人にとって美しさや心地よさに直結しづらいノイズや「ガラクタ」をもとにした作品群は、視覚体験を重視しがちな美術愛好家や実験的な表現に馴染みの薄い人には戸惑いもみられたようだ。挑戦的な試みは評価するが、作品を楽しむことを助ける何らかの工夫がもう少しあっても良かったのではないか。札幌において最も入場者が見込める時期でありながら、各有料会場の入場者数があまり伸びなかったことは残念である。入場者の広がりを感じられなかったことは、各イベントでも同様である。オーケストラや演劇、大風呂敷プロジェクトなどに積極的に参加した人達は充実した時間を過ごしたようだが、その気持ちが熱いほど、それ以外の人との乖離が生まれているように感じた。コンサートや各種イベントに出向いても、そうしたコアな参加者や関係者が大半を占め、互いに親しげに挨拶し合う光景などは、興味を抱いて訪れた他の人に疎外感を味わわせる排他的な雰囲気も少なからず醸していた。それが、ネット上で散見された「内輪だけでの盛り上がり」という印象につながる一要因にもなっていたのだろう。

次回開催に向けてのアドバイス

SIAF単独の成果だけではなく、芸術関係の各種事業や既存の組織、機関が他にも多くある札幌においての芸術祭の役割をしっかりと見据えるべきだろう。3年に一度、大きな予算と規模で行うことができる芸術祭が、札幌の文化に何をプラスしていけるかを考えると、他の機会では得難い先進的で刺激的な思い切った方針で行う重要性を感じる。独自性による北海道外からの注目度も然ることながら、札幌にいかに根付かせていけるかも大切にしてほしい。一度に多くの市民を引き込むことは困難であり、少しずつ広げていくしかないが、少しでも多くの人に興味や関心をもってもらう工夫とともに、それらの人が来やすい、入りやすい環境や雰囲気づくりを心掛ける必要があろう。一方、他の芸術祭に行った時に重宝するのは、作品ガイド付きで各会場を巡るバスツアーである。札幌の場合も会場が分散しているため、有料でも構わないので効率的に巡るための数コースを用意してはどうだろうか。また、子どもだけではなく、高齢者や障がい者が積極的に参加できるプログラムも今後検討してほしい。さらに、札幌ならではの独自性を出すためには、雪が積もった冬期間の開催が、冬季オリンピック・パラリンピック招致を見据える上からも含めて効果的だと思う。

全国各地で行われている芸術祭の魅力のひとつは、普通に観光として訪れただけではなかなか接することができない、その地固有の記憶や文化、庶民の日常に深く触れられることだろう。それは、美術館やギャラリー、整備された観光名所だけではなく、歴史が刻まれた民家や廃校、空き店舗なども会場となっていることにも関係していよう。札幌の芸術祭でも同様の効果が期待できるが、それは観光客に限ったことではなく、住民にとっても自らが住む場所の価値や魅力を改めて見いだすことにつながるものである。また、芸術祭が長く継続されていくことで少しずつ札幌の文化や社会に影響を与えていくはずである。芸術祭ごとに目に見えて残っていくものがあると、徐々に浸透してきていることが実感しやすいのではないだろうか。初回の島袋道浩の作品のように展示作品を残すことは今回難しいだろうが、SIAFで行ったイベントのうちのいくつかを今後も継続的に行っていくなど、モノではなくコトを残していくことも考えられよう。SIAF2017で行ったさまざまな事項のアーカイブ化をさらに深めていくこともその一つである。

「芸術祭ってなんだ？」を問い続けること ー札幌国際芸術祭2017を巡って

吉本 光宏

ニッセイ基礎研究所 研究理事

明確なディレクターシップ

ディレクターシップが遺憾なく発揮された芸術祭。それがSIAF2017の全体的な印象である。ディレクター自身の作品やライブはもちろんのこと、コンセプトや作家・作品のラインナップ、市電プロジェクトなどのイベント等々、街全体がノイズミュージックを奏でるような芸術祭だった。前回のSIAF2014は見そびれたため、資料で把握できる範囲内でのことだが、ディレクター色は今回の方が明確に現れていたのではないか。国内の他の芸術祭と比較しても、その点はSIAF2017が際立っていたように思う。キュレーターや美術家ではなく、音楽家をゲストディレクターに迎えたこともその一因だろう。ディレクターの選定は、芸術祭の成否を左右する最も大きな要因のひとつである。裏を返せば、大きなリスクを孕んでいるが、SIAF2017はその点で評価できる成果を残したと言える。しかも2回連続で音楽家を起用したことで、SIAFの特徴としてひとつのベクトルを示すこととなった。ゲストディレクター制度は、開催回ごとに独自のコンセプトやメッセージを発することが可能だが、芸術祭として統一的なイメージを形成しにくい側面も併せ持っている。SIAFが芸術祭として何を社会に訴えていくのか、市民や地域にとってどんな価値をもたらすのか。3回目には、そうした点について中長期的な視点からの検討が欠かせないだろう。それだけに次のディレクターの選定に注目したい。

都市空間と芸術祭

市街地を使った作品設置は前回よりさらに強化された。全ての会場を回ったわけではないが、個人的には北専プラザ佐野ビル、金市館ビル、りんご、札幌市資料館裏庭などが印象に残った。ロケーションと設置空間、作品内容にある種のゲリラ性を感じ取られ、「ガラクタの星座たち」というサブテーマとも合致していた。ガイドブックを頼りに、街中に展開される作品を探索するのは、芸術祭の楽しみの一つである。しかし、一カ所で集中的に開催される場合と比べて、賑わいや祝祭性という点では、不利な点も否めない。モエレ沼公園、札幌芸術の森、札幌市資料館の3会場を回れば主要な作品を鑑賞できるようになっていたが、短期間で市街地の会場も含めて回るのは楽ではない。それを不利な条件とするのではなく、プラスのものとするためには、作品の魅力だけではなく、芸術祭としての仕掛けや舞台づくりも重要な要素である。その点に関して、市電プロジェクトや狸小路TV、テニスコーツライブ、札幌駅や地下街に設置された大風呂敷プロジェクトなどは一定の役割を果たしていた。ただし、街中のサインやマップには改善の余地があるように思う。確かに目的の建物にたどり着いているのだが、入口や作品までのルートが分かりにくかった。特にりんごは閉館ギリギリで辺りがすっかり暗かったせいもあるが、最後の曲がり角が分からず数メートルのところで危うくたどり着けないところだった。マップには入口を矢印で示すとか、街中でのサインをより工夫するとか、ナビゲーション用のアプリを用意するとか、次回に向けて改善の余地があると思われる。さらに、街中全体を使って芸術祭を展開しようという主催者の意図に対して、観客は実際に芸術祭のどこをどのようなルートで訪れ、何を鑑賞したのか。会場ごとの入場者数の集計結果だけでは限界があるだろうが、その点も次回に向けて検証が必要なポイントの一つだろう。

芸術祭ってなんだ？

日本は国際芸術祭のブームである。昨年(2016年)はさいたま、KENPOKU(茨城県)、今年(2017年)は、岐阜、北アルプス、Reborn-Art(石巻)、種子島、奥能登といった具合に、毎年各地で新たな芸術祭が創設されている。芸術祭のディレクターでなくとも「芸術祭ってなんだ？」と問いかけたくなる状況だ。しかも現在継続中の芸術祭のほとんどは2000年以降に始まったもので、これほど短期間にこれだけ数多くのトリエンナーレ、ビエンナーレが始まった国は日本において他にはないだろう。乱立に対する批判、あるいはどこも似たり寄ったりの内容になりがちなことへの懸念はもっともなことである。しかしそれは俯瞰的な見方であって、どの芸術祭もその地域に

としては唯一無二のものであるという点を忘れてはならない。つまり、芸術祭ってなんだ?という問いかけは、普遍的なものであると同時に、開催地域ごとに個別の問いとして考える必要がある。仮に芸術祭を自然環境豊かな町村で開催される「里山型」と、札幌のような都市部で開催される「都市型」に分けた場合、この問いに答えを見いだすのは後者の方がハードルが高いはずだ。里山型の場合、作品を求めてその場所を訪問すること自体に意味を見いだすことができるからである。都会から訪れる人々は、経済性や効率性を優先する中で見失ってしまった地域の歴史や文化の価値を再発見するばかりか、深刻な人口減少と高齢化に直面する日本の現実が突きつけられる。地元の人々は、長い歴史の中で培われてきた文化的な営みや地域資源の価値を見直すきっかけになる。経済的な恵みや地域の活性化に対して芸術祭が果たす役割も小さくない。それ自体が芸術祭本来の目的でなかったとしても、あるいはたとえ一時的なものだったとしても、である。しかし都市型の場合、さまざまな文化施設が整備され、日常的に数多くの文化事業が行われている中で、芸術祭は市民に何を提供し、地域にとってどのような役割を担うのか。そのことを里山型以上に明確にする必要があるだろう。市が主導する文化イベントが他都市と比較しても充実している札幌の場合はなおさらだ。

札幌市の文化事業と
芸術祭

例えば、1990年に故レナード・バーンスタインの提唱で始まった「パシフィック・ミュージック・フェスティバル」、2007年スタートの「サッポロ・シティ・ジャズ」、26回を数える「YOSAKOIソーラン祭り」、2000本のショートフィルムが集まる「札幌国際短編映画祭」、劇場文化を札幌に根付かせようという「札幌演劇シーズン」等々である。これらの文化事業と比較した場合、芸術祭にはより強い社会的なメッセージや問題提起を期待したい、と思う。ジャズやYOSAKOIのように誰にでも分かりやすい、参加して楽しいというものではない。もちろんそれが悪いというわけではないが、見る人に新たな気づきや思索を促し、現代社会に対する新たな見方、時には批評的な思考を提供することに、芸術祭の少なからぬ意義がある、と思うからである。SIAF2017でもテーマやサブテーマから、ディレクターのそうした狙いを読み取ることができる。テーマには「参加する前と後で世界の見え方が一変するくらいの、そんな強烈な場を自分たちの手で作り出すことが、わたしの考える『祭り』です」とあり、サブテーマとして「ガラクタの星座たち」が掲げられ、「自分たちが捨ててきたものに向き合いつつ未来を発見する」とある。つまり「世界の見え方が一変するようなガラクタ」から芸術祭を組み立てることによって、私たちにメッセージを感じ取ってほしいというのが、今回の芸術祭の意図だったとすると、芸術祭全体からそれを感じ取ることができたのではないか。そういう意味でも、冒頭に述べたとおり、SIAF2017はディレクターシップが十二分に発揮された芸術祭だったと言える。

創造都市における 芸術祭

とは言え、芸術祭ってなんだ?という問いには永遠に答えがないだろう。ある種の解が示されたとすると、それを乗り越えるための問いかけを発することでしか、芸術祭としての存在意義が見いだせなくなってしまうと思うからだ。万人に受け入れられるような芸術祭になった途端に、芸術祭ではなくなってしまう。つまり芸術祭には、ある種のわかりにくさ、難解さがつきまとう。そうでなければ芸術祭の意味がない、とまでは言わないが、現代の芸術を扱う以上、そこから逃れることはできないだろう。創造都市にも同様の側面を指摘できる。創造とは今までに見たこともないようなものを生み出すことである。だとすると、市民に分かりやすいものだけを行っていたのでは、創造とは無縁になってしまう。たとえ、一般の市民には受け入れられそうにないものであったとしても、芸術ならではのアプローチで都市に未知の価値を与え、社会的な課題に新鮮な切り口を突きつけるような芸術祭こそ、創造都市には求められている。創造都市には寛容性が必要だ、とも言われる。言い換えれば、未知のものに対する好奇心が創造都市としての懐の深さや力量につながる。創造都市における芸術祭はその中心的な存在であってほしい。そうしたアプローチは、行政組織には決して容易なことではないはずだ。しかし、それが創造都市の宿命であり、芸術祭に期待されることではないか。「芸術祭ってなんだ?」。札幌市にはそれを問い続ける芸術祭を次回以降も期待したい。

インクルーシブでコミュニティ中心の芸術祭

Agnieszka Gratz アグネシュカ・グラツァ

アートライター

評価できる点

これまで2回の開催でSIAFは知名度の高い音楽家をディレクターに迎え、彼らの作品は本芸術祭のメイン展示になっていた。そのため、サウンドアートやライブコンサートの他、幅広い音楽関連イベントに重点を置き、広く多くの観衆を引き付けるようデザインされていた。これがSIAFの強みの一つであるとともに、この地域密着の芸術祭に強い個性を与えている。SIAF2017は、テーマに対して最新の芸術論や注目を集める芸術家によって主導されるキュレーションによるアプローチを目指しているのではなく、大友良英の大風呂敷プロジェクトに見られるような、あらゆる人を巻き込むインクルーシブでコミュニティー中心の芸術祭になることを目指しているように思われる。多数の面白みがあり、アイコンックな会場で作品を展示することにより、札幌の都市としての魅力を紹介している。

改善すべき点

- ・実務の問題点として、SIAF パスポートの入手が簡単ではなかった。パスポートを購入できる場所は少なかったため、パスポート販売のない会場に来場者が来た場合、遠くからはるばるイベントを見に来たにもかかわらず門前払いになってしまうことになる。
- ・JR 札幌駅の SIAF インフォメーションセンターは役立ち、スタッフはフレンドリーで英語が話せたが、案内表示を使うことにより、駅建物中でのインフォメーションデスクの場所を目立つように改善することが可能であろう。
- ・中心部から離れた会場への連絡バスの本数をもっと多ければよかった。
- ・全体テーマはあまり興味を引き付けられるものではなく、サブテーマ「ガラクタの星座たち」も面白みがないとは言わないが、一般的な来場者にとってはおそらくぼんやりしすぎていたのではないと思われる。

次回開催に向けての アドバイス

SIAF2017に参加したアーティストの大多数は日本人であった。結果として、「札幌国際芸術祭」はぴったりした名称ではないように思われる。SIAFを名称だけでなく真の国際フェスティバルにするためには、海外からさらに多くのアーティストを迎えるべきである。また、クリスチャン・マークレーなどの著名人だけでなく、新進アーティストも含めることにより、SIAF会期中及び準備段階における彼らの札幌滞在が、日本人アーティストとの芸術交流のさまざまな機会を創出するであろう。SIAFは“アート”フェスティバルとして、さらに洗練されたキュレーションによるアプローチや、今日の意味があり、かつ、タイムリーであるテーマの選択により、メリットが得られるのではないだろうか。

自由意見

数多くのフェスティバルやビエンナーレを観てきた者として、SIAF2017においてゲストディレクターの作品が目立って取り上げられていたことに驚いた。大友氏は、彼が参加したライブイベントに加えて、mima北海道立三岸好太郎美術館での自身の展示の他に、複数会場で作品を展示していた。これは悪いことではないし、大友氏は人気があり広く愛されている人物であるようだが、私は個人的に、今回の芸術祭がこのカリスマ的ディレクターに少しばかり偏りすぎていたように感じた。今後は芸術監督に加えて、キュレーターを選任してもよいかもしれない。

札幌ポリフォニー

Clélia Zernik クレリア・ゼルニク

パリ国立高等美術学校 芸術哲学教授／美術評論家

総評

SIAF2017の特色は、アーティストと市民だけでなく、アーティスト同士、人間と人間以外のものとの間に架け橋をつくり、つながりを構築することへの強い思いにあるのではないだろうか。ゲストディレクターである大友良英もまた、アートによって独立したものの間に調和関係を生じさせていた。各アーティストによる独立した作品をもう少し注意深く見てみると、作品は相互に呼応しているように見える。インスタレーションの多くは、出発点としてガラクタが使用されているが、それらはいまなお音を出し、動き続けていた。例えば、モエレ沼公園でみられた大友のインスタレーションでは、古い機器を接続しあい、星座が形成されており、それは人間ではないものの存在に語りかけているように思われる。毛利悠子のインスタレーションでは、複数の古いピアノが自ら演奏を始める。毛利は大学の長い廊下を風が吹き抜けるサウンドスケープに変え、過去のエコーを表層に呼び戻す。梅田哲也はデパートの忘れ去られた屋根裏で見つけたものを集め、それらを建物の振動に合わせるように作動させる。堀尾寛太は空きビルを使い、自動的にシャッターが開閉したり、照明がついたりするインスタレーションを展開した。この芸術祭を最後に取り壊される建物が、長い眠りから目覚め、あくびをし、叫び声をあげていたかのようだ。生命、記憶、物体の動きは人間の動きよりもはるかに大きい。私たち全てを一つにつなげる、この共通する生命の原理に注意を向けるべきではないか。端聡による美しいインスタレーション《Intention and substance》もまた、生命の循環に目を向けさせる。端聡は非常に短い循環回路で液体と気体の出会いをつくり出し、私たちの概念的カテゴリーを越え、無数の光が放たれる。これらの作品は全てに共通して、人間を除外した自動的な機能を使っている。本芸術祭は、もののつながりや関係性を称え、人々にこの例に従おうと誘っている。これが私なりのサブテーマ「ガラクタの星座たち」の解釈である。このようにして本芸術祭それ自体がポリフォニーとなり、一つのアート作品となる。大友にはフェスティバルを盛大な祝祭へと変化させる並外れた魅力がある。

評価できる点

ライブやパフォーマンス、DJ盆踊りなど、芸術祭に華を添えたイベントが多数あった。また、本芸術祭は、市民や観光客、子どもや高齢者など、あらゆる人を一つにすることを目指しているように思われる。このインクルーシブなコンセプトは非常に重要なものであり、アート界のみを対象とした欧米のビエンナーレ/トリエンナーレのエリート主義的コンセプトとはまったく異なっているように感じた。アート界の周りの全ての人を取り込むことは、社会的つながりを再構築する。できるだけ多くの人々を取り込むことが本芸術祭の目標であるならば、①開幕時における札幌以外での情報発信(推測するに、例えば東京の美術館やアンスティチュ・フランセのような機関などでの十分なPRができていなかったように思われる)、②会期中の会場のサイン(設置箇所や効果)、③終了時における国内及び海外プレスによる報道、来場者数、という3つのデータを評価、数値化することができると良いのではないだろうか。

改善すべき点

本芸術祭が全ての人を取り込もうとするならば、外国人への対応があまり行われなかったことを指摘する。ガイドブックや資料などで英語に翻訳されているのは一部のみであり、サインは読みにくく分かりづらい。各作品の作品解説はよく作られており、うまく英語翻訳されていたが(例えば、端聡の作品解説は極めて分かりやすかった)、全般的・実用的な情報の英語翻訳が非常に少なかった。夏の北海道には大勢の外国人観光客が来るのに、SIAF2017への外国人来場者は少なく、また、本芸術祭に関する英語情報は十分ではなかった。さらに、非常にローカルな地方イベントに参加しているという気分になるのは、おそらく国際的に知名度のある作品やアーティストが不在だからであろう。また、本芸術祭の独自性のあるビジュアルを効果的かつ明確にすべきであった。

日本の多くの芸術祭に共通していることだが、各展示会場が非常に離れていることも多少は来場者の意欲をそぐ要素になりうる。遠く不便な場所にあるように見えた会場に、足を運ぶことを諦めた友人もあり、結果として、本芸術祭の一部しか見ることができず、明確な理解が得られなかったようだ。

次回開催に向けてのアドバイス

大勢の来場者と外国人を引き付けるため、今回は国際的知名度の高いアート作品を1、2点展示することを推奨する。クリスチャン・マークレーや大友良英は非常に有名な国際的アーティストであるが、専門家ではない一般的な来場者にとってはやや特殊に感じたかもしれない。一方で、家族的なあたたかな雰囲気や、この芸術祭にエネルギーを与えている社会的・協働的な側面は残す必要がある。作品の気品、地域の歴史、そして芸術祭そのものが持つコミュニケーションを生み出す力を保ちつつ、さらに目を引くようなメジャーなイメージを加えていくことも必要であろう。例えば、全ての資料に本芸術祭のアイデンティティーとなるような画像を入れると良かっただろう。今回のガイドブックやウェブサイトにあるような抽象的な色使いよりも、簡単に認識できる画像の方がベターであったと考える。その方が独自性をより強くビジュアルで訴えることができ、あまり情報を得ていない来場者や外国人にも本芸術祭の特徴を瞬時に理解させることができたであろう。情報のコミュニケーションに関する取り組みは、どちらかというと一般的なガイドラインに即して行われるべきであり、また、北海道に観光で来る人の流れを本芸術祭に引き付けるための取り組みを行うべきである。なお、学術的な解説や内容は極めて正確であり、うまく行われていた。

自由意見

個人的には、いくつかの要素が一つのインスタレーションから次のインスタレーションへと循環し、大友良英の意図する目的が明らかにされていたと感じた。大友のようなミュージシャンを除いて、一般的には、アーティストが協働することはまれである。大友はアーティストにその認識を持たせることなくコラボレーションさせ、芸術祭の参加アーティストからジャズバンドのミュージシャンへと変化させた。これが、SIAF2017のテーマである「芸術祭ってなんだ?」の一つの解釈である。この疑問符は、密かに解釈の創出を待ち望んでいることを意味している。つまり、この芸術祭自体が、全ての作品がつながって生まれたマスターピースであるのだ。大友は芸術祭というコンサートの指揮者のように、異なる芸術表現の間でハーモニーを生み、人々をつないでいる。キュレーション自体が芸術表現の一つであるとも言えるだろう。参加アーティストが一つになり、家族や地域に親しみのあるものがあったことは高く評価するが、外部には十分に開かれていなかったように思われる。SIAF には、再構築に向けた力や情熱は十分にあるように思われる。私は、英語を話す友人が会場を案内してくれたことから、本芸術祭の高いクオリティと一貫性を大いに評価している。しかし、そのような手助けのなかった人たちは、この芸術祭の唯一性や知性を理解できなかったのではないかという懸念が残る。

市民と直接つながり、コミュニケートする芸術祭

David Novak デヴィッド・ノヴァク

カリフォルニア大学サンタバーバラ校音楽科准教授

総評

2017年9月20日から25日までSIAF2017に参加した。この期間中、ほぼ全ての展示を見て回り、パフォーマンスやイベントにも参加することができた。私は総合的に、SIAF2017に対して極めて好ましい印象を持った。展示の質は非常に高く、会場自体にとっても独自性があり、また芸術祭の一部として多くのワークショップやパフォーマンスイベントが企画されており、活気に満ち充実したスケジュールを構成していた。一連の展示物は先進的であり、既存の組織や施設、コミュニティースペースの活用や市民参加の促進という観点の両方において、札幌の資源を存分に活用していると感じた。大友氏は素晴らしいキュレーターであり、本芸術祭開催における大友氏の役割は、コンセプト的にもイベントの段取りに関しても顕著であり、芸術祭全体に同氏の影響が深く表れていた。

評価できる点

大友氏は地域社会を巻き込み、展示とイベント/パフォーマンス/ワークショップを織り交ぜてSIAF2017を企画した。このアプローチは、社会プロジェクトに携わったキュレーターであり、ミュージシャンでもある同氏個人の経歴を反映しており、今世紀に入って以降の社会志向アートへの大きな「社会の転換」ともぴったりと合致している。ノイズ電車や市電放送局JOSIAF、DOMMUNE SAPPORO!、OYOYO まち×アートセンターさっぽろなどのプロジェクトが一般参加型であったことで、札幌市民と直接つながり、コミュニケートする芸術祭が実現された。札幌は、国際フェスティバルの会場として、モエレ沼公園や札幌芸術の森、札幌市立大学、mima 北海道立三岸好太郎美術館やささまざまな商業施設に恵まれており、芸術祭を巡ることが札幌の建築様式やライフスタイルを楽しむスペシャルツアーになっていた。さらに、おそらく札幌ならではと思うことは、ゲストハウス、駅の通路、商店街、ビルなどのローカルな場所が展示会場として使用され、街全体が芸術祭に織り込まれていた手法も面白く味わった。これにより札幌の街を探索し、日常生活に溶け込む感覚がもたらされていた。「大漁居酒屋てっちゃん」が特に記憶に残った。

また、札幌のアートと音楽の長い歴史を垣間見ることもできた。NMAライブ・ビデオアーカイブ、mima 北海道立三岸好太郎美術館、そして札幌市資料館での展示は、市内の美術組織やアーティストに新しい作品をもたらした。私の限られた視点からではあるが、大友氏が地元のアートコミュニティを本芸術祭に巻き込み、札幌市民が最新のサウンドアートやパフォーマンスに触れ、クリエイティブな生活へのインスピレーションを得たことは素晴らしいかった。SIAF2017は、地元から国際的なコネクションに至るまで、利用できる資源の全てをうまく活用していた。「アジアン・ミーティング・フェスティバル2017 札幌スペシャル」は新進即興演奏者の国境を越えたネットワークとつながる絶好の機会であったし、札幌芸術の森会場のクリスチャン・マークレーの作品は重要な新しい取り組みであった。

改善すべき点

SIAF2017の最大の難点は、会場が市内全域に遠距離で散らばっているという根本的な問題であった。この問題は札幌の都市構造に伴うものであろうし、簡単に解決されるものではない。特色ある場所を利用しながらも、この問題をいかにスムーズに変えていくことができるか、私には分からない。私が経験したところでは、会場連絡バスはモエレ沼公園や札幌芸術の森へ行く際には便利であったが、バスをつかまえるのは不便な場合もあり、また満員だったこともあった。地下鉄やバスを使ってモエレ沼公園に自力で行くこともできたが、日本語を話せない人にとっては難しいのではないと思う。札幌駅は、混雑しすぎていて作品を簡単に設置できる場所ではない。通りすがりの人が思いがけずアート作品に目を留めるには良い場所であるが、プログラムからその場所を見つけ出すのが難しいことから、私なら札幌駅に重要な意義を持つ作品を設置することはしない。また、この点に関連して、英語版の作品解説が主な印刷物に掲載されていれば、日本語を話せない来場者に役立つのではないだろうか。展示会場を訪れることは時間を大いに費やすため、

何が見られるのかという意義がさらに分かるものや、本芸術祭のコンセプトや目的に関するPR資料という観点から、もう少し内容のあるものが求められるのではないかと思う。

最後の指摘としては、本芸術祭のキュレーションへの大友氏の有益かつ影響力の大きな関与が、別の観点からはセルフプロモーションであるとの間違った解釈をされてしまう可能性がわずかにあるということである。大友氏は、キュレーターとして独自性のある素晴らしい人物であり、SIAFの選考は称賛に値する。総合的に、これは大成功であった。しかし、このキュレーターの影響力が独自のネットワークや人脈に強く反映するのは避けがたく、また同氏の経歴が押し出されすぎていると見られる可能性はあった。例えば、キュレーターが自分自身の芸術活動に焦点を当てた展覧会(例:大友良英アーカイブ)を開催することは、あまり一般的ではないだろう。私の個人的見解としては非常に興味深かったが、この展示は参加アーティストの中でも作品紹介を行う最も大きな展示であっただろうし、本芸術祭で注目を浴びた大友氏の他のインスタレーションやパフォーマンスと相まって、参加アーティストの中でアンバランスな展示ではないか、という懸念を引き起こしたかもしれない。一方で、キュレーターが開催地に6カ月間移り住んで地域社会に溶け込むというのも一般的ではない。よって、彼の大きな関与によるメリットは数々あった。大友氏の類まれな人物像や献身によって、たくさんのエネルギーや参加者を生み出し、また、本芸術祭を唯一無二のものにしたのは明らかであることを改めて述べておきたい。

次回開催に向けてのアドバイス

SIAFの現行モデルには多くの長所がある。札幌はアートフェスティバルにはぴったりの美しい場所である。今回のパフォーマンスイベントやワークショップは社会的資源を耕し、札幌におけるクリエイティビティーを培うための素晴らしいモデルであったと感じた。市民がSIAFに寄与するプロジェクトに参加できることを知っていれば、芸術祭や地元アート界にさらに積極的に関与するようになる。大友氏のモデルはこの点において成功を収めた。結局のところ、芸術祭が長続きする長期的価値を生み出すのは、このような市民による継続したクリエイティブ活動のネットワークであり、それによって市民と外からの来場者の両方が、札幌は開かれたアートと文化の街であるとの認識を持つのである。従って、札幌市は力強いアートコミュニティの育成のため、SIAF開催年以外においてもアートプロジェクトを継続支援していくべきである。これは、一人一人のアーティストやアートグループの活動や、アートグループとコミュニティとの間で行うプロジェクトを促進する観点から、日常生活にアートを持ち込むべく、学校やアウトリーチの場などで実施していくべきである。創造的な機会が生み出される都市を札幌市民が志向しているとすれば、札幌市は芸術文化にすでに深い関わりのある都市であり、それを背景にSIAFは自然と生じてくるといえる。さらに地域に根ざした社会的創造性の価値が生まれれば、SIAFはより一層独自性の高いイベントになるだろう。あらためて、素晴らしいイベントを開催した主催者とキュレーターに拍手を送りたい。SIAF2017は将来に向けた大きな一歩であった。

魅力的で時に札幌の景観の探求をすることになった芸術祭

Reuben Keehan ルーベン・キーハン

クイーンズランド州立美術館 | 現代美術館 (QAGOMA) アジア現代美術キュレーター

総評

1980年代から90年代にかけた地方美術館ブームの再来のごとく、日本は今、新たなビエンナーレや芸術祭の乱立を経験している。これは、資金や動員の取り扱いという大きな課題を各事業にもたらず一方で、重要な問いも提起している。それは、大規模芸術祭に特徴を与えるものは何か、またそれは現状の文脈にどのように作用するのか、という問いである。

SIAFは、この土地の持つ地理的独自性や、初回から2回続けて、アーティストをディレクターに起用した点が特色となっている。興味深いことに、坂本龍一と大友良英はビジュアルアートではなく、ミュージシャンとして前衛音楽とポピュラー音楽にまたがる活動をしている。実際にSIAF2017開幕のプレスイベントにおいて、大友は「現代美術」という制度に対する反感を率直に公言し、多様なインスタレーションやパフォーマンスを通して主として音(=sound)に焦点を置いた展示をつくり上げていた。会場は、市内中心部から郊外にある主要会場まで40カ所以上にわたって広がり、札幌の景観を巡るという点においても本芸術祭は魅力的かつチャレンジングなものであった。

最も心ひかれた2つの会場は、市内中心部から離れた場所にあった。イサム・ノグチによる明確なビジョンが貫かれたデザインによるモエレ沼公園と南部に位置する札幌芸術の森である。両施設ともに、広大な野外環境と、アートに適した既存スペースであるという特徴を有している。芸術の森に隣接する札幌市立大学では、本芸術祭の見所の一つである毛利悠子の素晴らしいサウンドインスタレーション《そよぎ またはエコー》が展示され、札幌芸術の森美術館では、クリスチャン・マークレーの作品を概説するような優れた展示が行われていた。その他の見所としては、開幕週に行われたマークレーと大友によるアコースティックな実験的サウンドパフォーマンスと、正規の芸術表現から外れ、まるでそれに対抗するような北海道独自のクリエイティビティーに敬意を表した「札幌と北海道の三至宝 アートはこれを超えられるか!」が挙げられる。

評価できる点

明らかに実験的な要素の強い芸術祭において、大友は「盆踊り」の開催によって非常にアクセスしやすい入口をつくった。また、多数の会場にわたる展開により、来場者は各会場を移動しながら札幌のさまざまな側面を体感することができた。展覧会という観点から見ると、具体的なテーマを持たせるのではなく、はっきりとした手法と、音というメディアに焦点を置くという明確なアプローチがあったと言えるかもしれない。作品は概ねクオリティが高く、札幌の歴史や背景との関連性が感じられるものであり、また、会場の選択もうまく行われていた。

改善すべき点

来場者からは共通して、ガイドブックに掲載されていた地図のクオリティに対しての不満を聞いた。曖昧で不正確な部分が多い傾向にあった。概して、SIAF2017のような複数の会場で構成する大型芸術祭の場合、特に札幌以外からの来場者にとっては、地図は可能な限り明確かつ正確であることが重要である。市内にある各会場間を移動することは思わぬ場所の発見に恵まれる一方で、一般の来場者にとっては厄介なことになることもあり、優れた展示作品との出会いの機会を減らしてしまうことになるだろう。

次回開催に向けてのアドバイス

芸術祭に特徴を与えるものは何か、またそれは現在の芸術祭の文脈にどのように作用するのかという問いに立ち返ると、重要なのは札幌と北海道の背景に焦点を置くことであると言える。この点から、日本の他の芸術祭やビエンナーレにはできない方法で、どのようにしたらこの芸術祭を「国際的」にすることができるだろうか。ボーカルグループ・マレウレウの参加や、毛利悠子の砂澤ビッキ作品への関心は、現代のアイヌの表現と、沖縄や台湾、フィリピン、ボルネオ、オーストラリア、ニュージーランド、太平洋及び北米を含む各地の先住民アーティストとの対話のプラットフォームをSIAF

が創出し得ることを示唆している。SIAFには、ダイナミックで学際的なイベントであることを越え、北海道におけるアート制作の将来的な発展に直接インパクトを与えられる豊かな可能性がある。

自由意見

私は現代美術を専門とするプロのキュレーターであるが、制度としての「現代美術」に対して大友が示した反感に共感を覚えることがあるのを認めなくてはならない。一方で、現代美術をより広い文化領域に開こうとして、美術館や芸術祭が大手映画会社やファッションレーベル、世界的なブランドなどの商業文化を頻繁に活用し、それによって実験音楽、文学、演劇、ダンス、映画などに見られる真の実験やイノベーションが犠牲となっていることも、私は知っている。SIAF2017は、ストリートフェスティバルや地域の祭りといった異種文化の要素を取り入れることで、大衆を引きつける力を得た。今後の芸術監督の人選については、坂本や大友の後継者にふさわしい人物を見つけることが重要だと私は考えている。後継者は、商業主義を必要とせずに大衆受けするものとアバンギャルドとのバランスを取ることができ、ショッピングモールで見られるようなもののレプリカではなく、現代美術を他の実験的分野(音楽、文学、演劇、映画又はそれ以外のものであるかもしれないが)に広げていくことのできる人物であるべきだ。また、個人的な見解として、SIAFの課題は、本芸術祭の文脈において最も意味のある国際性の担保を模索しながら、刷新と継続のバランスをうまくとっていくことであると考えている。このことは、飽和状態となってきている芸術祭市場において、差別化を図ることにもつながるだろう。

Evaluation of the Sapporo International Art Festival 2017–

How art, sightseeing and festival management be balanced?

Amano Taro

Curator in Chief, Yokohama Civic Art Gallery Azumino / Sapporo International Art Festival Committee

General comment

This art festival was held under guest director Otomo Yoshihide. It was a genre-strad-
dling festival (fine art, music, etc.), and the director also participated as an artist. It
was also characterized by various venues that were scattered throughout Sapporo. In
addition, it was one of a kind in that the director was unusually spotlighted. Otomo's per-
formances and his chronicle at the Migishi Kotaro Museum of Art, Hokkaido were also
popular. It was also lucky that Otomo was originally associated with Sapporo.

Venues were scattered throughout the city, and works somehow represented the
nature of the venue, that is, the nature of the locality of Sapporo or Hokkaido. As a
result, viewers were able to be aware of the place by knowing the background of the
works while travelling around the venues. Viewers could also appreciate the reality
captured between the artist and the place rather than a global vision. This should also be
recognized. These trends would not have been won several years ago. Since the global
framework collapsed, however, it seems that the unit of an ethnic group or its living place
has become the smallest unit where values can be barely shared. Accordingly, it was a
meaningful structure.

I would like to mention the fact that there exists no main venue, which is a charac-
teristic and also a weakness of the Sapporo International Art Festival. That is an issue
I pointed out before the festival. It could cause serious problems with income (people
have to buy admission tickets to see the main venue in Aichi and Yokohama), and the
dispersed venues could put an extra burden on viewers. Meanwhile, except these nega-
tive points, travelling around the city provides increasing opportunities for viewers from
outside Hokkaido to discover something they didn't know about Sapporo and Hokkaido.
That said, in international festivals with a main venue, 60 to 70% of visitors to the main
venue moved to other venues. There is a tendency that people are satisfied with the main
venue only. Local governments are very much interested in the role or function of an
international exhibition as a tourist resource. In this regard, this situation in which visitors
have to travel around various venues can be utilized to promote tourism.

Outdoor exhibits were fewer than in the previous edition (Sapporo Ekimae-dori
Underground Walkway, Shimabuku's stone, Korogaru Park in Nature in the backyard of
Shiryokan), and more indoor places, especially rarely visited places, were selected as
venues. The places may not have been spectacular but the combination of the places
and works led to new discoveries. At Sapporo City University, visitors could enjoy archi-
tecture by Seike Kiyoshi and a site-specific work by Mohri Yuko. Exhibits by Sawa Hiraki
and Kuwakubo Ryota at HUG, CAI02 and Maruyama Zoo were also popular as site-spe-
cific works. Many people, especially visitors from outside Hokkaido, favorably viewed
the venues that were close to good eating places, including HUG (near Sapporo Factory),
OYOYO (near a soup curry restaurant) and Susukino.

The addresses of venues were not listed in the guidebook. Maps were included but
they were difficult to read. It was difficult to find buildings on the ground. The street maps
after going through ticket gates in the subway included platform numbers and were easy
to understand thanks to the cooperation of the Municipal Subway. Advertising such as
digital signage was effective at subway stations and in the Underground Walkway. The
SIAF colors were effectively used for ad-covered streetcars.

Venue structure and works

Public relations

Opening hours of venues

Stamp rally

Reception and supervision

Pamphlet

Means of transportation

Advice for the next art festival

Information on several time slots should have been provided more effectively. Some
visitors could have used pockets of free time to take in works and stopped by on their
way home from work.

It encouraged visitors to see all the venues, and the route avoiding the city center was
popular for stamp rally lovers. When exhibitions at public facilities (including universities)
and outdoors were cancelled due to Typhoon No. 18, it was great that the information
was provided through the Information Center at Sapporo Station, the official website and
social media sites.

Many people made favorable comments about the courtesy of staffs at each venue's
reception. For example, a visitor who lost his ticket at a venue said that he had a good
feeling toward a receptionist at the next venue who acted quickly and contacted the
previous venue to see if someone had left a ticket there.

Many people pointed out that the structure of the pamphlet was difficult to see.
Although it was revised, the first edition did not include the addresses of venues. Even
locals said it was hard to use. It couldn't be helped in print media, but limited-time exhibi-
tions and events were still listed in the pamphlet, which confused some people. Updated
information should have been provided at least on the event's website.

The 500-yen rental bicycle service in Sapporo was effective except in Moerenuma
and the Art Park. The price (500 yen) for rental from 6 a.m. to 12 midnight was reasonable.
Many overseas visitors used the service, and the receptionists were also praised for
their courtesy.

August is the summer holiday season, so accommodation fees are high. Many people
said that if shared houses and Airbnb could be used, they would spend more time in
Sapporo with their families. It is urgent to develop the accommodation infrastruc-
ture. Regarding the possibility of holding the event in winter, for visitors from outside
Hokkaido who are not familiar with snow, it will be challenging to look around exhibitions
over a wide area. The event should be held during the long summer holiday season to
attract more people, including the increasing number of inbound tourists.

As I mentioned earlier, the fact that there is no main venue should be used as an advan-
tage in the next art festival. However, it puts a heavy burden on the operation of the event
and requires a strengthening of curatorial activities such as the selection of artists and
how to exhibit works. As I have often proposed to the secretariat, it should be transferred
to the Sapporo Cultural Art Foundation to create a continuous organization. This seems
to be the only way for the above-mentioned human resource development, although
persons from the government are needed to serve as the director of the secretariat and
take other posts to liaise with City of Sapporo. It is an urgent task.

An art festival that breaks down fine art norms

Iida Shihoko

Independent Curator / Associate Professor, Tokyo University of the Arts / Associate Curator, SIAF2014 / Sapporo International Art Festival Committee

Points to be praised

Guest director Otomo's vision and policy for SIAF2017 were clearly expressed through the participation of artists who integrate music with fine art, and various civic participatory projects. The most important thing in the art director system is that the voice of the director reaches local residents, visitors and stakeholders. His thorough stance to make it an art festival for local residents with a selection of artists based on his own artistic tastes was positive characteristics of SIAF2017. Most works were pieces that can be felt throughout the body as audiovisual arts rather than visual arts, and many projects were conducted in a workshop style that provides a greater depth of experience. This art festival broke down the typical fine art norm. In addition to works for appreciation, experience and participation, subjective archives of Sapporo's cultural history were exhibited from an individual perspective. In the large context of an art festival, the consistent stance of the guest director, who tried to be an antithesis and alternative to the agenda of a usual festival, was highlighted. This defiant attempt became possible thanks to the high-quality works and the efforts of staff. A larger number of site-specific exhibits in multi-tenant buildings in the downtown area and buildings in the city were contrasted with exhibits in museums and other cultural facilities, adding depth to the art festival. Moerenuma Park, which was also one of the venues in SIAF2014, was set as the core of the concept, promoting the appeal of Sapporo and introducing tourism resources. Building on the experiences and failures of SIAF2014, civic participation made dramatic progress. This was the most important success. The graphic design was functional, readable and effective.

Points to be improved

The above points to be praised become points to be improved when they are looked at the other way around. Regarding the concept of "When Bits and Pieces Become Asterisms," the quality of works representing stars was high, but the entire art festival did not embody the asterisms. This edition could generally be regarded as a success, but if SIAF aims to be internationalized, it should also be an art exhibition worth seeing. The numbers of venues and events can be points to be praised and improved. Without curated exhibitions, numerous venues and events that are scattered throughout the city provide a feeling of dissipation. Continuous movements and changes during the event are desirable, but numerous small events can be followed by only the most dedicated festival lovers. One of methodologies that could be considered for future editions would be to make it a short-term event with intense large and small projects such as a film festival; or, the volume of exhibitions could be increased in the main venues. With regard to operation, it is required to improve the number of projects and organizational structure in line with the capacity and human resources of the secretariat. It seems that Sapporo residents' awareness of SIAF and participation were raised, but international visibility was not increased in the contemporary art domain. Consideration will be necessary on how important internationality is for SIAF. In some cases, it might be necessary to review and reconstruct the city's basic concept and shift the event to the Sapporo Art Festival.

Advice for the next art festival:

from the perspectives of uniqueness and continuity

SIAF2017 achieved uniqueness. Since it is extremely difficult to develop uniqueness in a sea of art festivals, it may be a good idea to set this event as a success model and select a non-fine art expert as a guest director for subsequent editions. However, appointing a non-fine art expert as a guest director often draws criticism from those involved in fine art. It may be worth thinking about a co-director system that employs a fine art expert and a non-fine art expert. With regard to operation, the numbers of projects and venues should be decreased to ensure the sustainability of SIAF. Although the guest director's passion and commitment are respected, the secretariat should take the initiative when planning the event in consideration of the capacity of the organization.

Free opinion

Given that SIAF is one of a few art festivals created from the bottom up in Japan, the elements that the event is held primarily for local residents and focuses are placed on contemporary art, are important. A variety of biennales in the world have proved that these two elements can be realized anywhere where there is the clear aim and vision for an art festival, regardless of the type of organization and scale of the budget. In Sapporo, local contemporary artists have organized contemporary art projects that also include international exchanges since the 1970s. The local government should support the creation of a framework (realized as SIAF today) that allows the sustainability of such events, particularly focusing on internationality, which is difficult for individuals to maintain. In the above points to be improved, I even suggested a shift to the Sapporo Art Festival as an idea, but SIAF should be reminded of its starting point in regard to "how important internationality is for SIAF (for local residents and contemporary artists)" and seek development as an "international" art festival. It was supposed to be one of the reasons for beginning the art festival in Sapporo.

Developing an art festival – for further expansion

Kumakura Sumiko

Professor of Tokyo University of the Arts (Department of Musical Creativity and the Environment / Department of Arts Studies and Curatorial Practices, Graduate School of Global Arts)

I saw almost all exhibits at SIAF2017, and was especially impressed by the work of Mohri Yuko, Horio Kanta and Umeda Tetsuya. Thanks to the successful artist-in-residence program, excellent installations were designed and created over time, satisfying visitors from far away at the event and making them say that it was worth travelling all the way to Sapporo to see them. At Moerenuma Park, the works of Otomo were exhibited among the works of invited artists, serving as an accent to and connecting the works of the invited artists and providing an exciting tour experience from an exhibition room to another. The concept for the exhibition at the Sapporo Art Museum was simple, but inspired young music lovers in Sapporo by highlighting a contact point between music and modern fine art. Unlike the deep exhibits at the Hokkaido Museum of Modern Art, Sapporo Art Park and the Red Brick (the Former Hokkaido Government Office) in the previous festival, this time the exhibits were characterized by a light and simple structure.

However, the true value of Mr. Otomo as a musician might have been expressed in live performances more than in exhibits. Particularly, people who met young musicians unleashed in the downtown area must have had an unforgettable experience. Mr. Otomo's human network turned the spotlight on minor music activities that have been passed down in Sapporo. This was historically significant. Unfortunately, I was not able to see any performances because I had such a short stay, although I efficiently took a bus tour that the Japan Association for Cultural Policy Research provided to see exhibits. I envied Sapporo residents. For visitors from far away who think that exhibits are the main attractions in art festivals, it might have been difficult to savor the sights and sounds of this art festival.

How was the event managed? As with the previous edition, I could feel the good teamwork in the operation team here and there in the art festival. Mr. Otomo's philosophy and inclusive operation policy –"an operation team like a big band" in his words– were highly suggestive for future art festivals in Japan. I hope the philosophy will root in Sapporo. The City of Sapporo's Secretariat was passionate and flexible about operating the festival in the same way as before although they may often have been challenged.

I just wondered why art-related people in Sapporo rarely responded to the festival from the preparation period. I often heard them say that they don't know what is going on. Do people think SIAF is an art festival by the city hall, for the city hall? If more foundations, universities, NPOs and artists participate in the art festival, and if all people in Sapporo work hard for and enjoy the art festival to develop themselves, it will be better. How should we develop the art festival when the director and secretariat staff members change every time? As I wrote in the previous evaluation report, the key is for local art-related people to increase their capacity to help support the festival and to continue/develop the festival based on their experiences. I hope for better management next time.

More vibrancy to be created through the selection and concentration of resources

Tarumi Hironori

Professor, Faculty of Law, Hokkai-Gakuen University (lectures on nonprofit organizations; arts and cultural policies) / Director, Kan Yasuda Sculpture Museum Arte Piazza Bibai (as well as Steering Committee member)

Points to be praised

- The thorough preparations and implementation system made possible by the cooperation between the Executive Committee and responsible department in the City Hall clearly demonstrates the advantages of the triennial format of the event.
- The fact that it attracts famous, accomplished and skilled general directors (Sakamoto Ryuichi last time and Otomo Yoshihide this time).
- Successive mayors (previously Mayor Ueda, currently Mayor Akimoto) have displayed ideal leadership during the series of phases (drafting, planning, implementation, appraisal, etc.) of the art festival.
- There were many ambitious and experimental exhibitions that utilized the infrastructure.
 - * Performances that utilized the streetcar during the Sapporo International Art Festival 2017 were of particular interest.
- The fact that the 2nd triennial event was executed admirably.

Points to be improved

Conversion from the current diffusion / distribution-style event to a more compact / densely concentrated event (Proposal 1)

The Sapporo Art Park in Minami Ward, and Moerenuma Park in Higashi Ward are far too remote. I very much agree with prescribing Sapporo Ekimae Street and the Sapporo Ekimae-dori Underground Walkway as the Welcome Gate but, unfortunately, there didn't seem to be a good turnout at that key "gate" during the period of the festival. I understand, to a certain extent, the City's wish to place importance on municipal facilities such as the Sapporo Art Park area (including the Sapporo City University) and Moerenuma Park area, but I believe more emphasis should have been placed on "the selection and concentration of resources (people, money, items, information, etc.)" and "the art festival's creation of a lively atmosphere". Or better yet, how about adopting a policy in which "the art festival is central" and "the fringe is for related events"?

Complete utilization of multilayered above-ground transportation, such as streetcars, velotaxis, shared cycles and the like, during the festival period. (Proposal 2)

In order to effectively stage a "lively" "city center art festival", as previously mentioned, the (ability to provide) efficient and dynamic above-ground movement of participants is necessary. The subways and buses also have a certain role to play, but there's no reason why we shouldn't utilize the loop-route streetcar, the velotaxis (human-powered taxis) that originated in Germany, and the Mobikes (shared bicycles) that arrived from China, which display the interesting development of Sapporo's multilayered network of diverse above-ground transportation. Attention should be focused on the realization of people's "movement around town as if breathing life into it." During the period of the festival, physically, financially and mentally, too, increasing the choice of above-ground transportation and the mutual connection of different means of transportation will help increase the appeal of the art festival itself, and also help convey the appeal of Sapporo's urban landscape to the world.

Advice

(including "free opinion")
with regard to the
staging of the next
edition

The "arenas" are in the town

(It seems that the clues have been found through the previous and this editions, but) changes in conception and new ideas should be accelerated with regard to the discovery of ways of utilizing "artistic arenas" for an art festival that is not tied to existing buildings such as art museums and public facilities. In particular, it is necessary to discover and unearth methods of utilizing commercial buildings, hotels, schools, cafes, shops, shopping streets, private houses, private warehouses and the like.
*The scale may be much smaller but, for example, the Hayama Art & Music Festival in Kanagawa Prefecture is a treasure-trove of ideas and I believe it could be used as a reference.

An important factor is money

I believe the key to the prosperity of an art festival is its function as a showcase for the trading of the work created there. A plan (= appeal) created on a municipal budget that originates from tax (= other people's money) should not just be left to an advertising agency or general director (= another person's power), but should be raised to a phase of a "spontaneous art festival", not only from a citizen base but also from an economic base. At world-renowned art festivals, I believe the importance of activities and exchanges of information with secret curators, galleries and art dealers in the fringe or behind the scenes and, in some cases, real commercial trading is, to a certain degree, common sense. At the same time, the successful experience in terms of financial profits of hotels and commercial facilities during the period are not to be taken lightly. In the short- and mid-term, an important attainment target will surely be that "SIAF is responsible for money being spent."

Nevertheless, people are the heart of the festival

However, as a precondition, as far as SIAF – which doesn't have Benesse or Tadao Ando – is concerned, there is no driving force to surpass the bottom-up power of the people. Having said that, "citizens" are prone to be known also as "an undisciplined crowd". I think it is essential to carefully examine what kind of citizens and citizens' power is necessary. Below is a list of sought-after civic models compared with those of the Setouchi Triennale (Art Setouchi).

Preconditions (the appeal of the town itself)

Setouchi: The idea of an art festival in such a remote, uneventful place is a god send → spontaneous power of the people such as the "Koebi-tai" support team and the like (hardly surprising)
Sapporo: An art festival that springs up in a place that has pretty much everything = just one of the appeals of the city → citizens are busy and leave everything up to the City (hardly surprising)

An art festival as a starting point of a journey vs. the finishing point of a journey

Setouchi: People gather with the "aim (finishing point)" of an art festival on small, uneventful islands → external success. As a result, discontent is latent → festival-style success in terms of visiting the art festival
Sapporo: "One of the reasons (starting point)" people are scattered around town is an art festival in a large city with urban functions → external failure. However, a certain level of travel satisfaction is ensured → all-round success in terms of visiting the art festival
(Does the appraisal of the art festival tend to be made considering that festival-style success is greater than all-round success?)

The model of citizens/civic power central to SIAF

- An art festival in which more of the face of the local people's representative –the mayor– can be seen: For example, at overseas art festivals (Paris and the like), "solo exhibitions" are held by artists –invited by the mayors– from regions around the world, who are not yet in the spotlight. Maybe "mayoral invitations" could become one of the highlights of SIAF.
- An art festival in which "Sapporo citizens at heart" can participate: Sapporo is a city with one of Japan's most prominent international brand strengths, with its Winter Olympics (1972), beer, ramen and the like. It would be good to devise a way in which those who love Sapporo without living here, and those who wish to travel or live here – in other words, "Sapporo citizens at heart" could participate in a special way at the SIAF.
- An art festival in which artists and artwork from around the world are the focus of lively buying and selling activities: Works of art spreading unprecedentedly as both interior decoration and as items that are the subject of somehow lucrative investment/speculation. During the SIAF period, I would like to see a scene in which pro and amateur buyers and sellers gather in Sapporo from around Japan and the rest of the world; in other words, the creation of an active showcase.
- An art festival for minorities: Maybe it is possible to strengthen the function of being the base for new art not bound to preconceived ideas, such as art brut (outsider art), indigenous peoples' art and the like.
- An art festival conveyed simultaneously via multiple languages and multimedia: By finding a method of overcoming the fact that art festivals in Japan lag conspicuously behind overseas art festivals regarding multilingual and simultaneous aspects, it would become one of Japan's most prominent art festivals in terms of international outlook.

Providing opportunity for local residents to experience the pleasure of an art festival is the priority

Fujita Naoya

Literary critic

Points to be praised

Compared with other art festivals, unique themes, such as music and noise, were involved. That deserves a nod of approval. The exhibitions that focused on carved wooden bears and other folkcraft articles were very nice. It was also interesting to bring "junk" as theme, which could be taken as negative stereotyping. Sapporo is a creative city in terms of media arts, and Hokkaido is known for its nature. These aspects can be highlighted. The works in the downtown area were great. Unique buildings such were boldly used as venues, allowing multiple contemporary art pieces to be seen.

Points to be improved

The festival was low-key as a whole. There was no power to attract people. Local people's sense of ownership was also low. It may be the cultural climate of Sapporo, but SIAF was cheerless compared with the art festivals of Echigotsumari and Setouchi, where local communities are involved (travelers enjoy having contact with locals). It seemed to have little effect on the local community. This also seems to be a problem unique to Hokkaido; everything was far away and it was inconvenient in terms of transportation. Both Sapporo Art Park and Moerenuma Park are beautiful, but access from the city center is bad. Tourists expect to see unfamiliar scenery, but the landscapes on the way to these venues were not unique, so the journey was boring. It may be a good idea to create artworks that incorporate transportation like the streetcar or to show videos for fun on the buses. The volume of exhibits at both venues was small, which caused a feeling of dissatisfaction. In Moerenuma Park, the whole area could have been used to exhibit 20 times as many works as in this edition (young local artists and students could have participated). Unfortunately, I must say that design was bad in terms of sightseeing.

Advice for the next art festival

The themes and contents of SIAF2017 were ambitious, but "noise" and "asterisms" may have been too advanced for themes. Appreciating noise, which seems only to exist when listening hard, is positioned as a reflection and criticism of spectacular art pieces. In Sapporo, which has little experience of spectacular contemporary art pieces, it was too early to appreciate noise, wasn't it? Priority should be given to involving local people in art by overwhelming them with flamboyant and intuitive contemporary art pieces. Compared with regions with a long history and tradition, Hokkaido has advantages and disadvantages. Traditional regions have abundant resources, people with a positive consciousness and social capital. In this regard, Hokkaido is at a disadvantage. However, it is an interesting place in that Sapporo is a newly designed city and has issues peculiar to modern times (pioneer days). Themes that appear to be negative, such as coal mines (energy development) and the massacre of Ainu people, are globally considered to be subjects that should be involved. By dealing with these modern-day issues, it may be possible to present a history unique to Sapporo/Hokkaido, but connecting it to regions around the world that face modern-day issues. That may develop ideas to attract visitors who are fed up with art festivals and the local art boom in Japan (visitors surely feel that ambitious activities that can be done only in a certain location and under unique themes are worth seeing).

Free opinion

The art festival could go beyond the framework of Sapporo. For example, various exhibitions can be held at New Chitose Airport. Hatsune Miku's theater can also be used. If the theme is "nature," the downtown area of Sapporo will not be suitable. Unspoiled, grand nature can be seen at, say, the Blue Cave. I guess that tourists who visit Hokkaido would like to see "nature" that cannot be seen in their daily lives. They would like to experience grand natural beauty. They would like to see flower gardens in Furano and the terrain of Lake Toya. Art can support nature rather than standing against nature. At the Kunisaki Art Festival, nature was promoted that way.

It may be good for private companies, such as companies related to Hatsune Miku and the computer industry to take a more active part. If Sapporo wants to promote media art, the power of private companies is necessary. Video game companies, such as Hudson and dB-SOFT, used to exist in Sapporo. This can be reevaluated and aggressively presented to appeal to gamers all over Japan ("game" is listed as a keyword for contemporary art in the *Bijutsu Techo* magazine, December 2017). Art festivals intended for only art fans cannot attract even art fans. Rather, creativity that alters and expands the outline of art will surely attract discerning fine art fans and involve many people previously disinterested in art.

An epoch-making art festival that enhanced its originality beyond the context of fine art

Hosoda Narushi

Writer

Points to be praised

It was great that underrepresented artists who are engaged in advanced expressive activities were spotlighted (e.g., Horio Kanta, Umeda Tetsuya, and those involved in NOISE TRAM; they are highly rated by some people, but are underappreciated by the general public). It was also great that the event was open to the general public without becoming "art for art's sake" and enjoyed by non-fine art experts, especially families and children (e.g., *(with) without records*: viewers including children were free to walk around; map of *Otodate*: stimulated an exploration spirit; *dot kai dot / DKD*: had a spectacular element). Many of the artists who produced these exhibits or performed usually act as musicians rather than fine artists, so the entire art festival was beyond the context of fine art, and the festival's uniqueness was strengthened as a result. Social media sites were also used for offering information. Visitors were allowed to photograph most exhibits, and they looked good on Instagram, so visitors spread information on social media like word-of-mouth communication. This is also highly evaluated as public relations strategy tailored to today's information environment.

Points to be improved

Since multiple venues were scattered over a wide area, tourists who stayed for a short period were not able to see all of them. This "elusiveness" itself was good*. However, many tourists only visited major spots (e.g., Moerenuma Park, Sapporo Art Park) without getting around various venues, resulting in less exposure to other events and art works. One of the purposes in the festival's basic concept is to "revitalize the art scene unique to Sapporo." As far as this year's edition is concerned, I had a strong impression of works by artists who are close to guest director Otomo Yoshihide, and did not feel the local art scene. There were works using Sapporo's geopolitical situation and cityscape, exhibits about the history of the city, and site-specific exhibits and live performances. I felt the attraction of Sapporo but not of artists living there. Due to the paradoxical standardization of experience, as mentioned above, the local art scene may have been invisible.

*As Yabumae Tomoko, one of the SIAF band members, said in "At the End of an Art Festival," a running story on the website "web Chikuma," SIAF made a remarkable contribution in highlighting the motives of artists while most other publicly funded art festivals, held as local revitalization, focus so much on risk aversion and meticulous planning that the artists' motives tend to get weakened.

Advice for the next art festival

This art festival is characterized by the fact that a musician served as a guest director and the unique aspect "between music and fine art," which is different from sound art in the context of fine art. I hope that these characteristics will continue. It is also necessary to consider from diversified perspectives what novelties can be gained from its uniqueness. For example, this year's festival was featured in art magazines, but it could have been picked up as a music festival in music magazines. I hope for such collaboration with various media for the next edition. Since the next festival is scheduled to coincide with the Tokyo Olympics, it will be necessary to further highlight the attraction of Sapporo as a creative city. For example, not only exhibitions and performances but also workshops, with which it takes time to bear fruit, were held in the festival. What kinds of achievements will the participants make three years later? I expect this aspect to be shown in the next edition. This will make an art festival that clearly shows visitors the unique art scene of Sapporo.

Free opinion

Since I was a tourist who visited Sapporo for the first time to see the art festival, I enjoyed the exhibits and live performances and felt the attraction of the city. However, partly due to its "elusiveness," experiences seem to be quite different for local residents and tourists who stay for a short period. More specifically, visitors can be classified into Sapporo residents who can easily visit the venues, suburban residents who need some time to visit the city, and tourists who can visit Sapporo only once during the festival period. These visitors are also classified into those who visit the city to see the art festival and those for other purposes but find the art festival accidentally (see the below figure).

People in these categories seem to have had different experiences in the art festival. In this year's edition, their different experiences were not necessarily ranked but considered equal to each other due to the "elusiveness." The information provision strategy on social media sites was effective for those who visited the city to see SIAF, but I doubt if it was effective for suburban residents who happened to visit and Sapporo residents who did not follow the event. Since most of the visitors are from Sapporo or the suburbs, an information strategy suitable for those categories will be necessary. It will be desirable to develop fitting strategy for each category, and it will be also necessary to avoid the paradoxical standardization of experience by securing diverse experiences in the same category.

	Sapporo residents	Residents in the suburbs of Sapporo	Tourists
For the art festival	Have contact with the art festival in their day-to-day lives. They have opportunities to visit every day.	Visit the art festival in their day-to-day lives. They have opportunities to visit a few times.	Come for the art festival. They have only one opportunity to visit.
For other purposes	Sapporo residents who don't know or who are not interested in the art festival. It is possible to get them know or make them interested in the festival over time.	Residents in the suburbs who visit Sapporo for other purposes. A good first impression may make them visit a few times.	Tourists who visit Sapporo for other purposes. They are unlikely to visit again regardless of their first impressions.

Need for a bold policy that would be impossible in other events and efforts to help people enjoy art

Yoshizaki Motoaki

Manager, General Affairs Section, Sapporo Cultural Arts Foundation / Japan Foundation for Regional Art-Activities / Sapporo International Art Festival Committee

Points to be praised

The distinct personality of the guest director, who is a musician, was reflected on the festival and the theme was consistent throughout the event. These points made the festival unique and different from other art festivals. It artistically spotlighted expressions that had rarely been highlighted and things that had long been in Hokkaido but neglected, providing a new stimulus to Sapporo residents. Many local people participated in the project team, and ideas were publicly sought to develop official projects. Opportunities were also provided for locals to participate in concerts and theatrical plays, and as volunteers for the O-furoshiki Project. These represented the organizer's awareness of local power and an intention to get locals involved in the event, making it different from the previous event. A number of projects that were developed through activities in this area were powerful enough to spread beyond the boundaries of the local area. The guest director stayed in Sapporo almost all through the festival and appeared in various events, creating a cohesive impression on the festival and developing an affinity with local residents. Many events, including pop-up events, were held in different places, successfully creating a festive mood.

Points to be improved

Both art lovers and people unfamiliar with experimental expressions seemed to feel confused by works created from noises and "bits and pieces" (junk) as they are not beautiful or pleasant for many people. I praise the effort but a little more work to help viewers to enjoy works was needed. It is a shame that the attendance in fee-charging venues did not increase as expected, even though the event was in a high season that attracts many people to Sapporo. It is also a shame that not all the events attracted a range of people. Some people who actively participated in the orchestra, theatrical plays and the O-furoshiki Project seemed to have a rewarding time, but I felt that their enthusiasm created a feeling of distance for other people. The majority of people in concerts and various other events were very enthusiastic participants, and the sight of people greeting each other in a friendly way created a clubby atmosphere that brought a feeling alienation to other people. This may have led to the impression of a "private festivity," an expression that was often seen on the Internet.

Advice for the next art festival

Serious consideration should be given not only to the results of the art festival but also the role of an art festival in Sapporo, which is home to various other art projects, organizations and institutions. The triennial art festival is a large-scale event with a large budget, which could add something to the culture of Sapporo. Such an event could employ an advanced, stimulating and bold policy that would be impossible in other events. In addition to the uniqueness of the festival to attract attention from outside Hokkaido, it is also important to consider how to have the event take root in Sapporo. Attracting many local residents at once is difficult, so there is no choice but to increase visitor numbers little by little. It is necessary to make efforts to get as many people as possible interested in the event and create an accessible environment and a welcoming atmosphere. When I visited another art festival, I found that a guided bus tour to travel around venues was convenient. In Sapporo, venues were scattered over a wide area. It may be a good idea to prepare a few courses for bus tours to efficiently travel around the venues, even if it is subject to fees. I hope that programs not only for children but also elderly people and those with disabilities will be planned. I think that an art festival in winter with snow is effective for highlighting the uniqueness of Sapporo and for hosting the Olympics as well.

Free opinion

One of the appeals of art festivals all over Japan is that visitors can experience the memories and culture of the area and the daily lives of local residents in the area, which are rarely experienced in sightseeing tours. It is related to the fact that not only art museums, galleries and tourist spots but also private houses, abandoned schools and vacant stores are used as venues. The art festival in Sapporo is also expected to have a similar effect, and provides opportunities for tourists and local residents alike to discover the value and appeals of the area. As the art festival continues over time, it will gradually affect the culture and society of Sapporo. If there are legacies of each festival, they will help people realize that the festival has gradually gained popularity. Unlike the piece created by Shimabuku at the first event, it may be difficult to preserve exhibits in this festival, but it may be possible to continue some events of this festival in the future; that is, to leave behind events rather than things. Promoting the archiving of various things that were done in this festival is one such effort.

Keep asking the question, "How do we define 'Art Festival'?"

– Beyond Sapporo International Art Festival 2017

Yoshimoto Mitsuhiro

Director of the Center for Arts and Culture , NLI Research Institute

Clear directorship

An art festival, in which directorship was exercised to the fullest. This is my overall impression of the Sapporo International Art Festival 2017. Not only the director's works and live performances, but also the concept, the lineup of artists and works, the Streetcar Projects and other events – it was an art festival where it felt like noise music was played in the whole city. I missed SIAF2014, so I just understand it with only materials, but the director's color seems to have been more apparent in SIAF2017 than before. In this regard, SIAF2017 was more outstanding than other art festivals in Japan. One contributing factor was that the guest director was a musician rather than a curator or a fine artist. The selection of the director is a key element in the success of an art festival. It also involves a great risk, but SIAF2017 was a commendable success in that regard. Musicians have been picked for the post twice in a row. This showed the direction of the Sapporo International Art Festival. The guest director system makes it possible to deliver a concept and a key message that are unique to the year's event, but it makes it difficult to form a uniform image of the art festival. How does SIAF appeal to society as an art festival? What value does it bring to local people and the community? These points should be considered from a medium- to long-term perspective for the third edition. The selection of the next director will deserve special attention.

Urban space and the art festival

More works were installed in the downtown area than before. I did not visit all the venues, but I was impressed by Hokusen Plaza Sano Bldg., Kinichikan Bldg., Ringo, and the backyard of the Shiryokan. I felt a certain type of guerilla characteristic in the locations, spaces and works, and it matched the sub-theme, "When Bits and Pieces Become Asterisms." Exploring works exhibited throughout the city with a guidebook in hand was part of the fun of the art festival. Compared with events that are intensively held in one place, however, I have to admit that it was disadvantageous in terms of festivity. Major works could be appreciated in Moerenuma Park, Sapporo Art Park and the Shiryokan, but it was not easy to visit all the venues in a short period of time. To turn the disadvantage to an advantage, it is important to highlight not only the appeal of works but also attempts and venues unique to the art festival. In this regard, the Streetcar Projects, Tanukikoji TV, the Tenniscoats live performances, and the O-furoshiki Project at Sapporo Station and the underground shopping arcade worked quite well. However, there is room for improvement in the signs and maps in the downtown area. I was able to reach the destinations, but it was difficult to understand the routes to the entrance or works. Particularly, I almost lost my way to Ringo at the last corner about a few meters from the venue because it was near closing time and dark. This needs some improvement, such as showing the entrance with an arrow on maps, using more easy-to-follow signs in the downtown area and preparing a navigation app. The organizer intended to use the whole city for the art festival. Which venues did they visit? Which route did visitors actually use? What did they appreciate? It is necessary to examine these points for the next event although there is a limit to how well they can be evaluated just from the attendances at individual venues.

How do we define 'Art Festival' ?

In Japan, international art festivals are booming. New art festivals started in Saitama and Ibaraki (KENPOKU) in 2016 and in Gifu, the Northern Alps, Ishinomaki (Reborn-Art), Tanegashima and Okunoto in 2017. Against this backdrop, even people other than the director of an art festival may want to ask, "How do we define 'Art Festival'?" Most of the existing art festivals began in and after 2000. There is no other place than Japan where

so many triennale and biennale have been launched in such a short period time. It's only natural that people criticize the flood of art festivals and are concerned that they are all alike. This is taking a broad view, but what should not be forgotten is that each art festival is special to its region. In other words, the question of "How do we define 'Art Festival'?" is universal, and at the same time, it should be considered as an individual question for the region. If we divide art festivals into the village type that is held in natural surroundings and the urban type that is held in an urban area like Sapporo, it is harder to find a clear answer for the latter type than for the former type. This is because in the village type, people can find meaning in visiting there to see works. Visitors to village-type events from urban areas can rediscover the value of local history and culture, something they may have forgotten while focusing on economy and efficiency, and they also experience the reality of Japan's falling population and aging society. Local people have an opportunity to review the value of cultural activities and local resources that have been handed down over generations. Village-type art festivals play a significant role in bringing about economic benefit and local revitalization. It is great even if it was not the original goal of an art festival or even if it is temporary. In the urban type, where there are various cultural institutions and many cultural projects are conducted on a daily basis, what does it provide for local residents? What kind of role does it play for the local community? It is necessary to more clearly answer these questions in the urban type than in the village type. It is all the more so with Sapporo, where there are more cultural events initiated by the city than in other cities.

The City of Sapporo's cultural projects and art festival

The city's cultural projects include the Pacific Music Festival, which began in 1990 following a proposal by the late Leonard Bernstein, the Sapporo City Jazz, which began in 2007, the YOSAKOI Soran Festival, which marked its 26th anniversary in 2017, the Sapporo International Short Film Festival and Market, in which 2,000 short films are shown, and the Sapporo Engeki Season, an event to root theater culture in Sapporo. Compared with these cultural projects, I hope that the art festival will present social messages or questions rather than just providing an opportunity for everyone to easily participate and enjoy, like jazz and YOSAKOI. Of course, an easy-to-understand and enjoyable event is not bad, but I think that the art festival has profound significance in helping viewers to discover new visions and thoughts, get new perspectives of contemporary society and give critical interpretations. I understood this to be the intention of the director from the theme and the sub-theme of SIAF2017. The director said about the theme, "The festival I am imagining is creating, with our own hands, an intense place where our view of the world will be drastically changed after being there." The sub-theme, "When Bits and Pieces Become Asterisms," was explained by saying, "these pieces of work will help us to face the things we have dumped and to find the future." If the intention of this art festival was for us to understand his message from the art festival created by "bits and pieces that can drastically change our view of the world," I must say I felt it from the art festival as a whole. In that sense, as mentioned at the beginning, SIAF2017 was an art festival in which the directorship was exercised to the fullest.

Art festival in a creative city

Even so, there can be no answer to the question, "How do we define 'Art Festival'?" If an answer was indicated, an art festival must keep posing new questions to retain its significance. If an art festival becomes universally accepted, it will no longer be an art festival. In other words, there is always some sort of unintelligibility or difficulty in art festivals. I'm not going to say, otherwise, art festivals mean nothing, but there is no escape from it as long as contemporary art is featured. There is a similar aspect in creative cities. Creativity means to create new things that have never been seen. If so, creating only things that are easy to understand for local people is completely unrelated to creativity. Even if not accepted by the public, an art festival that provides unknown value to the city with an artistic approach and adds a fresh dimension to social issues is required for creative cities. It is said that tolerance is necessary for creative cities. In other words, curiosity about the unknown leads to the generosity and competence of creative cities. I hope an art festival will be at the center of a creative city. Such an approach is not easy for administrative organizations. However, that is the fate of creative cities and what is expected for art festivals. How do we define 'Art Festival'? I hope that the City of Sapporo will organize an art festival that keeps asking that question.

Inclusive and Community-centered Art Festival

Agnieszka Gratza

Freelance Art Writer

Points to be praised

For its first two editions SIAF chose to appoint as directors high-profile musicians whose work has also been featured in the festival. Hence the emphasis on sound art, live concerts and the wide-ranging musical offerings designed to appeal to a broad audience. This is one of SIAF's strengths and it gives this particular regional art festival a strong identity. SIAF does not seem to aspire to a curated approach with themes driven by art discourse and artists of the moment, but rather to be all inclusive and community-centred as Otomo Yoshihide's O-furoshiki project attests. By staging works in a host of interesting and iconic venues, it showcases Sapporo as a city.

Points to be improved

- On a practical level, getting hold of the festival pass was not altogether straightforward; there were not many places where they could be purchased, so if a visitor turned up at a venue that did not sell the pass they would be turned away, even if they had come a long way to see a show.
- Although the staff at the SIAF Information Center of the Sapporo JR station was helpful, friendly and spoke English, the visibility of the stand inside the station could be improved through signposting.
- More frequent shuttle bus services to outlying venues would have been welcome.
- I did not find the overall theme very engaging and the sub-theme ("When bits and pieces become asterisms"), though not uninteresting, was perhaps too obscure for your average visitor.

Advice for the next art festival

The vast majority of artists in this year's SIAF were Japanese. As a result, the festival's name ("Sapporo International Art Festival") seemed something of a misnomer. In order for SIAF to become a truly international festival, in more than name alone, more artists from abroad should be included. And not just the big names, such as Christian Marclay, but also emerging artists, whose presence in Sapporo during and in the run up to the festival would create opportunities for artistic exchange with their Japanese counterparts. As an art festival, SIAF could benefit from a more sophisticated curatorial approach and the choice of a theme that feels both relevant and timely.

Free opinion

As someone who attends a lot of festivals and biennials, I was surprised to see how prominently the Director's own work featured in SIAF. Aside from live events in which he took part, Otomo Yoshihide had works in a few of the venues as well as his own exhibition at Migishi Kotaro Museum of Art, Hokkaido. While this is certainly not a bad thing, and Otomo seems to be a popular and well-loved figure, to me this festival felt a little too dominated by its charismatic director. A case may be made for appointing a curator in addition to an artistic director for future editions of SIAF.

Sapporo Polyphony

Clélia Zernik

Professor of Art Philosophy, Beaux-arts de Paris / Art Critic

General Comment

The specificity of this festival seems to be in the desire to build bridges, to create connections, not only between the artists and the public, but also between the artists themselves, and between the human and the non-human. Otomo Yoshihide, the artistic director of the Sapporo festival, also uses a pre-established harmony system made possible by art. Each work is autonomous and was conceived by one artist alone. However, if we examine them a little more closely, the installations seem to answer each other. All of them use as their starting point the debris of a world that has come to an end, yet which continue to emit sound or movement. For example, in the Otomo installation the old devices are connected to each other and form a constellation that seems to address to a non-human presence, as in the Isamu Noguchi Moerenuma Park project; in the installation by Yuko Mohri, old pianos start playing on their own: she transforms a long university corridor into a soundscape where the wind can blow, bringing echoes from the past back to the surface. Testuya Umeda gathers objects he discovered in the forgotten attic of a department store, and sets them in motion in relation to the building's vibrations. Kanta Horio occupies an abandoned house and installs it with a device that allows it to open its doors and turn the lights on its own. It almost seems as though this haunted house has awakened after a long sleep, yawned and let out a shout, before being destroyed once and for all at the end of the Triennial. The movements of life, memory and objects are greater than those of humankind. Should we not stay attentive to this common basis of life that connects us all together? *Intention and Substance*, a beautiful installation by Satoshi Hata also encourages us to pay attention to the cycle of life. Satoshi Hata creates an encounter between liquid water and gaseous water in a very short circuit, defying our conceptual categories and exploding in myriad backlit sparks. All these works share an automatic quality from which humans are excluded. This festival celebrates the networking of things, the relationships between pieces and invites people to follow this example: that's how I interpreted the subtitle of the festival – "When bits and pieces become asterisms". Festival thus becomes polyphonic, a total artwork. There is quite an enchanting side to Otomo that turns festivals into full-blown festivity.

Points to be praised

There are a lot of events, turning around this festival, for example lives, performances, Bon Odori DJ set. Also the festival seems to want to integrate everyone, visitors and locals, children and seniors alike. This very inclusive conception of the festival seems to me very important and very different from the elitist conception of western biennials / triennials which are exclusively addressed to the world of art. To include everyone around an artistic party rebuild the social link. In this way, festivals become new models of society, responses to disasters. If the goal is to include as many people as possible, it seems interesting to be able to evaluate and quantify three data: upstream, information about the festival outside Sapporo (a priori, it seemed to me that there was for example not enough advertising in Tokyo in places such as museums or institutions, such as the French Institute, etc.); on site, signage (density and efficiency); downstream, fallout in the national and international press, numbers of visitors.

Points to be improved

If the festival seems to include everyone, it should be noted however that few things are addressed to a foreign public. The guidebook and all the documentation and information in situ are only partially translated into English, the signage is not very readable and understandable. In general, the cartels for each piece in particular are very well made and translated into English (for example the cartel for Satoshi Hata is extremely relevant), it is rather the elements of general understanding and practical information that are too

few. In attendance at the festival, a small number of foreign visitors is to be observed, even though many foreign tourists visit Hokkaido in summer but stay insufficiently long in Sapporo to inquire about the festival. It sometimes feels to attend a very local and provincial event, perhaps because some pieces or artists already well known by the international public are missing. The visual identity of the festival must be more effective and concrete. The fact that the exhibition venues are very distant (as in many other Japanese art festivals) can be a little discouraging, - some friends have given up going to certain places because it seemed too far away and inaccessible, and consequently had a truncated and partial vision of the event, which seemed unclear to them.

Advice for the next art festival

I would recommend for the next festival to include one or two international high-profile artworks to attract a large audience and foreigner visitors. Christian Marclay and Otomo Yoshihide are very famous international artists but may have seemed a bit specialized for a non-connoisseur audience. On the other hand, it is absolutely necessary to preserve this atmosphere of family festival very warm, this social and collaborative dimension which gives all the energy to this festival. It is necessary to preserve the elegance of the chosen works, the local inscription and the communicative energy, but perhaps to add a more striking, more mainstream image. For example on all communication documents, it would have been good to have a picture that gives a visual identity to the festival. Rather than abstract colors, as on the guidebook or website, an easily recognizable and less abstract picture would have been better. It seems to me that it would have given a stronger visual identity that allows both less informed visitors and the foreign public to understand more immediately the specificity of the festival. Communication efforts should rather be made on the general guideline and should primarily address the flow of tourists who come to Hokkaido to attract them to the festival. The scientific explanations and details are extremely precise and well done.

Free opinion

In my opinion, some elements recur from one installation to the next, making Otomo Yoshihide's deliberate aim obvious. In general, artists (except perhaps musicians, like him) rarely work together. He decided to make them collaborate without their knowledge, transfiguring them from artists in a festival into musicians in a jazz band. This is one way of understanding the title of the Triennial: How do we define "Art Festival"? The interrogative form means the festival is hidden and awaits construction: the festival itself is the masterpiece, born of the connection between all the other works. Otomo Yoshihide is like a great conductor, and the festival is a concert, creating harmony between the different artistic proposals and connecting individuals. In one way, with Otomo Yoshihide, curating becomes an actual art form. I really appreciated the pleasure that the artists had in being together, there was something family and local very friendly - but perhaps insufficiently open to the outside. There is a lot of youth, passion and desire, and a desire to build and rebuild. For my part, as I was guided on all sites of the event and helped by English-speaking friends, I greatly appreciated this festival of a very high quality and very consistent. But I fear that those who were not accompanied like me could not understand the festival in its singularity and intelligence.

An Art Festival to Connect and Communicate Directly With the Public of Sapporo

David Novak

Associate Professor of Music, University of California, Santa Barbara

General Comment

I attended the Sapporo International Art Festival from September 20-25, 2017. In this time period, I was able to visit almost all of the exhibits, as well as attending several performances and other singular events that took place during the time of my stay. My overall impression of the Festival is very favorable. The quality of the exhibits was very high, the sites were in themselves very unique, and there were also a number of exciting workshops and performance events programmed as part of the festival, which made for a dynamic and rich schedule. I thought the range of exhibitions was forward-thinking and made excellent use of existing resources in Sapporo, both institutionally and in terms of cultivating community spaces and local participation. Mr. Otomo was a terrific curator, whose role in organizing was significant both conceptually and on-the-ground in arranging events, and his influence showed deeply throughout the festival.

Points to be praised

Mr. Otomo organized the festival as a mix of exhibits and events / performances / workshops that involved the community. This approach reflects both his personal history as a curator and musician involved with social projects, and aligns well with the larger "social turn" to socially oriented art since the turn of the millennium. The participatory nature of projects such as the Noise Tram and Streetcar Radio Station, Dommune and OYOYO Machi x Art Center realized the potential of an art festival to connect and communicate directly with the public of Sapporo. As a site for an international festival, Sapporo is blessed with unique local sites such as the stunning Moerenuma Park and Sapporo Art Park, as well as the Sapporo University, Migishi Kotaro Museum of Art, Hokkaido and various businesses, which made exploring the festival into a special tour of Sapporo architecture and city lifestyle. Perhaps even more uniquely, I also appreciated the way in which local sites - such as hostels, train station passageways, shotengai and ordinary buildings -- were used to house exhibits, and how the city was woven into the fabric of the festival. This gave the festival a sense of exploration and integration into everyday life in the city (Tairyo Izakaya Tecchan was especially unforgettable...).

I also enjoyed the glimpses into long-term art and music histories in the city. The NMA Live Video Archive, Migishi Kotaro Museum of Art, Hokkaido, and the exhibits in Shiryokan gave a sense of place to the festival, and helped to place newer works in the long-term logic of arts organization and the life of artists in the city. From my limited perspective, Mr. Otomo did an excellent job of bringing out the local arts community and involving them in the festival, as well as exposing Sapporo citizens to a current wave of sound-oriented arts and performance that will inspire new engagements with creative life. SIAF2017 really took advantage of all of the resources available, from local to international connections. The Asian Meeting Festival 2017 was a wonderful opportunity to connect with an emerging transnational network of improvisers, and the Christian Mar-clay pieces were quite important new works.

Points to be improved

The biggest drawback to the organization of the festival was the inherent problem of the locations being spread out very far across the city. Frankly, this problem might be inherent to the city structure, and is not easily solved. I'm not sure how you could easily change this without losing access to these unique sites. In my own experience, the shuttle buses made it easier to go to Moerenuma Park and Sapporo Art Park, but sometimes it was not convenient to catch them, or they were full. For example, I could navigate my own way to Moerenuma Park via subway and bus, but I imagine that a non-Japanese

speaker would find it challenging. Sapporo Station, frankly, is too busy of a place to easily locate the pieces. It is a good location for passerby to stumble upon artworks, but I would not install items of significance there, since it is difficult to locate them from the program. Following this point, I think non-Japanese visitors would probably benefit from an English language program that translated the descriptions of the artworks more consistently and in a central document. Because it is a significant investment of time to visit some of the sites, they would probably require more of a sense of what they would see, and perhaps a little more context in terms of PR materials regarding the conceptualization and goals of the festival.

A final point is the minor potential for Otomo's otherwise very positive and strong involvement in the festival curation to be misinterpreted as self-promotion. Mr. Otomo is a unique and exciting choice for a curator, and I applaud SIAF for taking this opportunity. Overall it was highly successful. But it is perhaps unavoidable that the curator's influence strongly reflects their own networks and personal connections, and there were a couple of points at which Mr. Otomo's personal history could be viewed as overrepresented. For example, it may not be too common for a curator to have an exhibit (e.g. Otomo Yoshihide: *Sound that Flies to the Moon*) dedicated to their own artistic history. Though fascinating from my perspective, this was perhaps the most extensive profile of any artist in the festival, which, coupled with Mr. Otomo's other high-profile installations and performances in the festival, could lead to concerns about an imbalanced representation among the participating artists. On the other hand, it may not be common for a curator to move for 6 months to a festival site and immerse themselves in the local community! So these are the positive benefits represented by his strong involvement. I again state that Mr. Otomo's unique profile and personal dedication clearly generated lots of energy, participation, and also the special characteristics that made the festival so enjoyable and unique.

Advice for the next art festival

There are many strengths to the current model for SIAF. The city is an excellent and beautiful location for an arts festival. I thought that the performance events and workshops were great models for cultivating social resources and fostering creativity in the city. If local residents know that they can be involved in projects that contribute to SIAF, they will become more invested in the festival and in creating a local arts world. I think Mr. Otomo's model was successful in this capacity. Ultimately it is this local network of ongoing creative work among residents that generates the long-term value of a perennial arts festival, so that both locals and outsiders know Sapporo as a place of open arts and culture. Therefore the city should continue to support arts projects in the years between festivals to cultivate a strong arts community. This should take place in terms of fostering the work of individual artists and collective arts groups, projects between arts groups and everyday communities, in schools and other sites of education and outreach, and maker-spaces and clubs to bring arts into everyday life. If the public is already oriented towards the city as a place that cultivates local opportunities for creativity, then SIAF springs naturally from a city that is already deeply invested in arts and culture, and the city can generate locally rooted values of social creativity that will make SIAF an even more original event. Again, I applaud the organizers and curators for a very special and successful event. SIAF2017 was a great step toward the future.

Festival was an engaging and sometimes challenging way to explore Sapporo's landscape.

Reuben Keehan

Curator, Contemporary Asian Art, Queensland Art Gallery | Gallery of Modern Art (QAGOMA)

General Comment

In an apparent replay of the prefectural museum boom of the 1980s and 90s, Japan is suddenly experiencing a glut of new biennials and art festivals. While this presents significant challenges for individual events in terms of resourcing and audience share, it also raises an important question. What makes a large-scale exhibition special, and what can it do for its context on an ongoing basis?

Sapporo International Art Festival is distinguished by the unique geography of its location, and by the appointment of artists as directors of its first two editions. Intriguingly, Sakamoto Ryuichi and Otomo Yoshihide largely operate outside the visual arts, as musicians whose work straddles the avant-garde and the popular. Indeed, at a press event in the opening days of SIAF2017, Otomo openly professed an antagonism toward the institution of 'contemporary art', creating an exhibition that was largely focused on sound through a range of installations and performances. Sprawling across no less than 26 venues from the downtown core to significant locations at the city limits, the project was an engaging and sometimes challenging way to explore Sapporo's landscape.

The two most captivating venues were the furthest from the city centre: Moerenuma Park, built from a visionary design by Isamu Noguchi; and Sapporo Art Park in the city's south. Both have the benefit of expansive, open-air settings and existing art-friendly spaces. Adjacent to the Art Park, Sapporo City Univeristy hosted one of the highlights of the exhibition, Mohri Yuko's extraordinary sound installation 'Breath or Echo', while an excellent, focused survey of the work of Christian Marclay was held nearby at the Sapporo Art Museum. Other highlights included a fully acoustic experimental sound performance by Marclay and Otomo during the opening week, and 'Three Great Treasures of Sapporo and Hokkaido', which paid tribute to the island's renegade creativity from outside the formal artistic sphere.

Points to be praised

For an exhibition with such a high proportion of content with a decidedly avant-garde character, Otomo provided a remarkably accessible entry-point, staging a 'bon-odori' dance for Sapporo's end of summer festival. As a multi-venue event, it also provided the opportunity for visitors to experience different aspects of the city as they moved through venues. In exhibition terms, it might be said that there was no particular theme, but there was a clear methodology, and a clear approach to media, focusing on sound. Works were generally of a high quality and felt relevant to the history and context of Sapporo, and venues were well chosen.

Points to be improved

A common source of complaint from visitors was the quality of the maps included in the exhibition guide, which tended to be vague and inaccurate. In a large, multi-venue exhibition like SIAF, it is important that maps are as clear and accurate as possible, especially for visitors from outside Sapporo. The sheer number of venues in downtown Sapporo may also have been challenging for casual, non-specialist visitors. While moving between venues is a wonderful way to discover unlikely sites within a city, it does tend to discourage the general public, meaning that fewer people would be able to experience the wonderful work that was on display.

Advice for the next art festival

To return to the question of what makes an exhibition special, and what it can do for its context on an ongoing basis, it is important to focus on the context of Sapporo and Hokkaido. In this sense, how can this art festival be 'international' in a way that other Japanese art festivals and biennales cannot? The inclusion of the vocal group Marewrew and Mohri Yuko's interest in the work of Sunazawa Bikky suggest that SIAF could provide a platform to bring contemporary Ainu expressions into dialogue with First Nations artists from elsewhere, including Okinawa, Taiwan, the Philippines, Borneo, Australia, New Zealand, the Pacific and North America. There is a rich possibility here that beyond being a dynamic, multi-disciplinary event, could directly impact on the development of art making in Hokkaido into the future.

Free opinion

I must admit that though I am a professional curator of contemporary art, I sometimes share the antagonism that Otomo expressed towards "contemporary art" as an institution. I do find, however, that in attempting to open contemporary art up to broader cultural fields, museums and art festivals too often embrace commercial culture, such as big movie studios, major fashion labels, globally renown brands, to the detriment of genuine experiment and innovation that can be found in experimental music, literature, theatre, dance, cinema and so on. SIAF2017 was successful in drawing its popular appeal from a different kind of culture: of street festivals and community celebrations. In selecting future artistic directors, I think that it will be important for SIAF to find a fitting successor to Sakamoto and Otomo, someone who can balance the popular and the avant-garde without the need for commercialism, who can open contemporary art up to other experimental disciplines, be they musical, literary, theatrical, cinematic or otherwise, without replicating what can already be found in a shopping mall. The challenge for SIAF, as I see it, is to balance innovation and engagement while seeking ways of being international that have the most meaning to its context, in order to distinguish itself in what is becoming a crowded marketplace for this sort of event.

札幌国際芸術祭実行委員会

〈2018年3月1日現在〉

実行委員会

顧問

高橋 はるみ（北海道知事）

顧問

岩田 圭剛（札幌商工会議所 会頭）

会長

秋元 克広（札幌市 市長）

副会長

岸 光右（札幌市 副市長）

副会長

蓮見 孝（札幌市立大学 学長）

委員（監事）

酒井 裕司（一般財団法人さっぽろ産業振興財団 専務理事）

委員

菊嶋 明廣（札幌商工会議所 専務理事）

広瀬 兼三（株式会社北海道新聞社 代表取締役社長）

若泉 久朗（日本放送協会札幌放送局（NHK）局長）

星野 尚夫（一般社団法人札幌観光協会 会長）

長澤 徹明（公益財団法人札幌市公園緑化協会 理事長）

白鳥 健志（札幌駅前通まちづくり株式会社 代表取締役社長）

廣川 雄一（札幌大通まちづくり株式会社 代表取締役社長）

橋本 道政（公益財団法人札幌市芸術文化財団 副理事長）

甲谷 恵（北海道環境生活部 文化・スポーツ局 局長）

大川 祐規夫（北海道教育庁生涯学習推進局 局長）

小西 正雄（札幌市経済観光局 局長）

高野 馨（札幌市市民文化局 局長）

事務局（札幌市市民文化局 国際芸術祭担当部）

事務局長 熊谷 淳

事務局次長 松浦 剛

●実行委員会開催

2015年度 第1回 2015年6月16日（火） / 第2回 2015年10月1日（木） / 第3回 2016年2月12日（金）

2016年度 第1回 2016年6月2日（木） / 第2回 2017年3月28日（火）

2017年度 第1回 2017年5月10日（水） / 第2回 2017年7月6日（木） / 第3回 2017年11月27日（月）

札幌国際芸術祭
コミッティー

天野 太郎（横浜市民ギャラリーあざみ野主席学芸員）

飯田 志保子（インディペンデント・キュレーター / 東京藝術大学准教授 / SIAF2014アソシエイト・キュレーター）

久保田 晃弘（多摩美術大学教授 / アーティスト）

吉崎 元章（札幌市芸術文化財団総務課課長職 / 一般財団法人地域創造派遣）

助成・協賛・協力

●助成



平成29年度 文化庁文化芸術創造活用プラットフォーム形成事業

一般財団法人地域創造 ニトリ北海道応援基金 台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

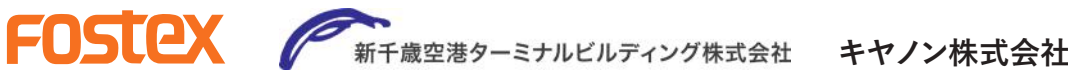
損保ジャパン日本興亜「SOMPO アート・ファンド」(企業メセナ協議会 2021 Arts Fund)

Office for Contemporary Art Norway **OCA**

●協賛



●特別協力



●協力



一般社団法人 札幌ハイヤー協会 さっぽろ天神山アートスタジオ ノルウェー王国大使館

関係者クレジット

RE / PLAY / SCAPE
企画:宮井 和美
共催:公益財団法人 札幌市公園緑化協会
協力:公益財団法人イサム・ノグチ日本財団、山口情報芸術センター[YCAM]、ワタリウム美術館 ほか

●ARTSAT×SIAFラボ《Sculpture to be Seen from Space, Improvisation to be Heard from Space. 宇宙から見える彫刻、宇宙から聞こえる即興演奏》／《Sculpture for All of the Intelligence 全知性のための彫刻》

○プロジェクトリーダー:久保田 晃弘(ARTSAT／SIAFラボ)

○開発

プロジェクトマネージャー:小町谷 圭(SIAFラボ)

堀口 淳史・中澤 賢人・宇佐美 尚人・橋本 論(ARTSAT)、石田 勝也・船戸 大輔・金井 謙一・藍 圭介(SIAFラボ)

開発アドバイザー:岩谷 圭介

協力:気象庁札幌管区気象台、札幌大谷大学、札幌市立大学、多摩美術大学、北海道大学創成研究機構

○展示

アーティスティックディレクター:平川 紀道(ARTSAT)

サウンド:矢坂 健司

無線:堀口 淳史

照明:時里 充、大庭 圭二(Ryu)

映像:田所 淳

デザイン:小酒井 祥悟(Siun)

機材協力:株式会社シンタックスジャパン、東芝ライテック株式会社、東リ株式会社、フォスター電機株式会社 フォステクスカンパニー

制作協力:株式会社クワザワ工業、野方電機工業株式会社、株式会社佐々木製作所

○広報・記録

映像・アーカイブ:石田 勝也(SIAFラボ)、門間 友佑

ウェブサイトイラストレーション:川成 由(SIAFラボ)

ロゴデザイン:白井 宏昭

●大友 良英+青山 泰知+伊藤 隆之《(with)without records》

テクニカルスタッフ:山元 史朗、平林 慎、樋口 勇輝

テクニカルサポートスタッフ:高井 奈々、山田 知之

ワークショップ参加者・設営ボランティア:阿部 哲平、石川 勇人、上杉 孝行、大藤 健、川村 恵、木浪 さくら、木村 学、後藤 美弥子、志村 美紀、進藤 理、鈴木 由信、塚原 義弘、間可 裕樹、中村 啓一、中屋 一史、中山 さおり、干場 良光、蒔田 浩平、松田 英一郎、眞鍋 昌揮、三上 京子、三上 千年、安田 せひろ、柳本 理恵、山本 晃平

プロダクションマネジメント:福田 幹(MDR)、坂口 千秋

共同開発:YCAM InterLab.

協力:山口情報芸術センター[YCAM]

●大友 良英《サウンド・オブ・ミュージック》

システム設計:伊藤 隆之

●ナムジュン・バイク《K-567》

協力:ワタリウム美術館

●松井 紫朗《climbing time / falling time》

協賛:帝人フロンティア株式会社

●伊藤 隆介《長征―すべての山に登れ》

協力:佐々木 けいし

●大黒 淳一×SIAFラボ《沼紋》

環境センサー開発:石田 勝也・船戸 大輔(SIAFラボ)

NEW LIFE:リブレイのない展覧会

企画:藪前 知子

共催:札幌芸術の森(公益財団法人札幌市芸術文化財団)

展示・運営協力:梅村 尚幸、坂本 真惟(札幌芸術の森美術館)

●クリスチャン・マークレー《Record Without a Cover》

《Recycling Circles》《Lids and Straws (One Minute)》ほか

協力:ギャラリー小柳、SETENV

●刀根 康尚《Il Pleut(雨が降る)》

プログラミング:伊藤 隆之

音響装置設計・制作:牟田口 景(WHITELIGHT)

○関連イベント「AI Deviation」

プログラミング:トニー・マイヤット(サリー大)

システムオペレーション:伊藤 隆之(YCAM)

音響設計:牟田口 景(WHITELIGHT)

共同開催:北翔大学

●€Yヨ《ドッカイドー／・海・》

○関連イベント「ドット・リーム | DOT LEEM」

サウンド・オペレーション:増子 真二

センサー・オペレーション:堀尾 寛太

●鈴木 昭男《点 音》

展示補助:眞木 裕太

●藤田 陽介《CELL》

展示補助:眞木 裕太

協力:大原 昌宏(北海道大学)、川本 思心

毛利 悠子《そよぎ またはエコー》

作曲:坂本 龍一

詩:砂澤 ビッキ(英訳:管 啓次郎)

声:カミュー・ノーマント

制作:伊藤 里織、田中 信司

プログラミング:イトウユウヤ

照明エンジニア:大庭 圭二(Ryu)

施工:HIGURE 17-15cas

制作マネジメント:坂口 千秋

制作協力:砂澤 凉子、高嶋 雄一郎、高橋 洋一、山口 創司、上遠野 敏、石田 勝也、沼山 良明、丸田 知明、佐藤 真奈美、小田井 真美、佐々木 雅子、鈴木 萌、佐々木 暁、松岡 貴志、フェリペ・ロドリゲス・マルチネス、川上 大雅、佐野 誠、空 里香、川上 佳津仁、上田 理子、山下 誠、渡辺 直樹、山内 博、渡来 拓郎、長谷川 朋美、高井 奈々、楠崎 真央、小林 大賀、蝦谷 凜之介、園山 茉生、原 雅司、布施 晴香、南 怜花、村川 龍司、樋口 勇輝、吉住 唯

協力:札幌市立大学、一般社団法人清水沢プロジェクト、ノルウェー王国大使館

機材協力:フォスター電機株式会社 フォステクス カンパニー、ヤマハミュージックリテイリング札幌店

助成:Office for Contemporary Art Norway **OCA**

梅田 哲也《わからないものたち》／《りんご》

協力:辻石材株式会社、有限会社エイトワン

特別協力:株式会社 POS 建築観察設計研究所、永田 壘

設営協力:平林 慎

ボランティアスタッフ:西村 康子、沖田 ななえ、小谷 有加、高田 秀美、和田 めぐみ、松吉 菜々子、石山 ひなの、平尾 拓也、山田 大揮、町田 かすみ、太田 茅乃、桑田 真帆、小倉 幸恵

キュレーション&コーディネート:雨森 信

端 聡《Intention and substance》

テクニカルスタッフ:東辻 聖、福津 圭佑

協力:小西工業、今村技研、三穂電機(株)、Y・S・コーポレーション、TRUNC、イトウ設備、寺田 英司、高橋 喜代史、今村 育子、川上 大雅、福井 淳、安田 せひろ、西村 遥奈、小澤 千穂、トラスト・C・ハワード、Shoko Honke、佐藤 史恵、藤原 裕倫

トークゲストスピーカー:港 千尋

札幌・北海道の三至宝 アートはこれを超えられるか!

企画:上遠野 敏

協力:札幌市立大学学生ボランティア

●レトロスペース坂会館別館

館長:坂 一敬、副館長:中本 尚子

●大漁居酒屋てっちゃんサテライト

協力:UR都市機構、小熊商店

●北海道の木彫り熊〜山里稔コレクションを中心に

協力:山里 稔、清水 敏、瀬野 一郎、渡辺 拓治、上田 悟、曾山 輝義、立体の熊公募入選の皆様

●地球の声を聞いた男・三松正夫の昭和火山火山画

協力:三松 三朗(三松正夫記念館館長)

●赤平住友の炭鉱遺産:坑内模式図

協力:赤平市、赤平市教育委員会、吉田 勲、三上 秀雄、赤平コミュニティガイドクラブ“TANtan”

DOMMUNE UNIVERSITY OF THE ARTS THE 100 JAPANESE CONTEMPORARY ARTISTS season 5

協力:レッドブル・ジャパン株式会社、フォスター電機株式会社 フォステクスカンパニー、山本現代

配信:宇川 直宏、渡邊 元、埼玉 匠海、徳地 恭太、大塚 黒

音響:百瀬 俊介、荻野 良平

クワクポリョウタ《LOST#16》

リサーチ協力:南陽堂書店、札幌市公文書館

協力:札幌市円山動物園

堀尾寛太《補間》／《テレグラフ》

●《補間》

制作アシスタント:新美 太志、眞木 裕太

制作ボランティア:水石 公基、和根崎 海、高橋 せいか

協力:TASKO inc.

●《テレグラフ》

制作アシスタント:眞木 裕太

制作ボランティア:松吉 菜々子

設営協力:堀川林業株式会社

協力:株式会社札幌振興公社、浄土宗藻緑山観音寺

狸小路TV

番組ディレクター:五十嵐 いおり、加賀城 匡貴、木原 くみこ、中島 洋、中田 美知子、西野 功泰、早川 涉、福津 京子

プログラミング:大塚 黒

企画協力:今野 勉、長沼 修、是枝 裕和、松井 茂、後藤 一也

冊子編集:佐藤 優子

文:今野 勉、長沼 修、上杉 一紀、是枝 裕和、松井 茂

印刷物デザイン:モンマユウスケ

什器制作:こんの工作所

協力:札幌狸小路商店街振興組合、HBC、HTB、UHB、STV、富士フイルム株式会社

運営協力:シアターキノ

さわ ひらき《うろ・うろ・うろ》

音楽:ASUNA

キャスト:MC MANGO、阿児 つばさ、梅田 哲也

撮影協力:アキタヒデキ、宮出 実希

設営協力:ヒロセガイ

ファブリケーター:林 一平、MU.industries

協力:北海道教育大学、キャンノン株式会社、株式会社丸昭佐藤組

キュレーション&コーディネート:雨森 信

中崎透×札幌×スキー「シュプールを追いかけて」

アシスタントコーディネーター:赤坂 文音、黒岩 絵里子

アドバイザー:安斎 伸也、川上 大雅

協力:青森公立大学国際芸術センター青森、ウバシプロダクション、札幌オリンピックミュージアム、真駒内セキスイハイムアイシアリーナ、株式会社秀岳荘、北大山岳館、SNOW Freaks、鈴木 馨二、我満 嘉明、我満 嘉治、佐々木 大輔、山口 正廣、金井 哲夫、小野 浩二、児玉 毅、在田 一則、原田 廣記、高澤 光雄、芳賀 孝郎、芳賀 淳子、上野 英孝、伊藤 大悟/DAIGO、井山 敬介、金子 由紀子、白取 史之、住吉 智恵、四方 幸子、小牧 寿里、斎藤 誠子、クリストファー・オアー、坂口 千秋

SIAF500メーターズ:わたなべひろみ、原口 淑子、長谷川 宏美、細川 瑛代、関田 勝己、佐々木 蓉子、南沙樹、小坂 祐美子、三宅 美緒、石山 ひなの、松本 みどり、吉田 慎司

デザイン:乗田 菜々美

設営:小野田 藍、風間 天心、菊地 風起人、吉川 貫一、小嶋 亮平、黒島 正範、今 瑞希、河野 紫、瀬戸 一成、高畠 路子、寺島 奈歩、東辻 聖、福井 さら、福津 圭祐、眞木 裕太、安田 せひろ、安田 千皓、山崎 愛彦

SIAF2017 オフィシャルバー「出会い」at OYOYO

協力:OYOYO(株式会社グローブマン 黒田 仁智)

バー運営:今村 育子、川上 大雅、佐野 由美子、高橋 喜代史、端 聡

空間デザイン:五十嵐 淳

札幌デザイン開拓使 サッポロ発のグラフィックデザイン〜栗谷川健一から初音ミクまで〜

企画:ワビサビ

資料協力:北海道デザイン協議会 ほか

火ノ刺繍－「石狩シーツ」の先へ

企画:藪前 知子

撮影・編集:鈴木 余位

録音・音響設計:牟田口 景(WHITELIGHT)

協力:中森 敏夫(テンボラリースペース)

後援:北海道大学総合博物館

○関連イベント「吉増 剛造×空間現代」「吉増 剛造×鈴木ヒラク」

映像:鈴木 余位／映像補佐:竹本 英樹、川添 彩、広田 智大

映像演出:山本 圭太

音響設計:牟田口 景(WHITELIGHT)

NMAライブ・ビデオアーカイブ

企画:沼山 良明

制作:須之内 元洋、川上 大雅

撮影:門間 友佑

編集:須川 善行

機材協力:フォスター電機株式会社 フォステクスカンパニー

テラコヤーツセンター「土砂」

企画:テニスコーツ(さや、植野隆司)

特別協力:MC MANGO

協力:アプト、新しい人、ほか

制作協力:アートセンター土砂

○テニスコーツ@市立大学

企画:毛利 悠子

札幌市資料館を拠点としたアートプロジェクト

●アートとリサーチセンター

企画・運営・館長:小田井 真美(さっぽろ天神山アートスタジオ / AIRディレクター)

デザイン・運営アシスタント:寺岡 桃

データベース・公開メディア構築:須之内 元洋

調査記録作業アシスタント:足立 岬、澤口 優七、塚崎唯、平中 麻美子

コーディネート:SIAF ラボ

協力:岡部 昌生(美術家)、小牧 寿里(写真家)、梁井 朗(北海道美術ネット)、北海道マガジン「カイ」編集部(株式会社ノーザンクロス)、NPO S-AIR、小室 治夫(杉山留美子基金 代表、JRタワー ARTBOX ディレクター)、佐藤 友哉、吉崎 元章、磯崎 道佳(美術家)、柴田 尚(北海道教育大学 教授 / NPO S-AIR 代表)、穂積 利明(北海道立近代美術館 主任学芸員)、北海道新聞文化部、阿児 つばさ、深澤 孝史(アーティスト)、小樽市立小樽美術館、菊池 史子、清水沢プロジェクト(代表:佐藤 真奈美)、公益財団法人札幌市芸術文化財団

●サカナ通信

編集長:猪熊 梨恵(NPO 法人札幌オオドリ大学)

副編集長:松崎 修(菓子行商gaburi)

運営・コーディネート:杉本 直貴(一般社団法人 AIS プランニング)

協力:SIAFラボ編集局

●CAMP SITE PROJECT「裏庭」

企画・運営:SIAF ラボ

石川直樹展「New Map for North」

企画協力：アヨロラボラトリー

協力：札幌宮の森美術館＋NPO法人CAPSS、北海道博物館、キヤノン株式会社

コーディネート：岡澤 弦

コタンベッププロジェクト

企画・コーディネート：富田 哲司

空間デザイン：五十嵐 淳

アイヌ文化アドバイザー：マユンキキ（八谷 麻衣）

協力：建築学生同盟北海道組、一般財団法人アイヌ民族博物館、

公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構（アイヌ文化財団）、

さっぽろ冒険遊びの会、地方独立行政法人北海道立総合研究機構、

NPO法人札幌オオドオリ大学

ゲストハウス×ギャラリープロジェクト Sapporo ARTrip「アートは旅の入り口」

コーディネート：大井 恵子（Gallery 門馬&ANNEX）、川上 大雅（salon cojica）、中村 一典（TOOV cafe/gallery）、平塚 智恵美（Kita:Kara Gallery）

市電プロジェクト～都市と市電

協力：札幌市交通局

●ラッピング電車 SIAF 号

企画・コーディネート：漆 崇博、細川 麻沙美

ワークショップ講師：佐藤 直樹

ワークショップ参加者：和田 琉太、南部 隼、伊藤 侑希、石坂 亘、古山 聖悦、関戸 快晴、

高橋 久遠、高橋 祇遠、佐藤 彩理、池田 葉月

共催：札幌市中央区、札幌市交通局

●市電放送局 JOSIAF

プロジェクトメンバー：ウリュウ ユウキ、坂田 太郎、高橋 弥子、成瀬 絢子、三上 拓馬、堀内 まゆみ、朴炫貞、松林 英太
運営・コーディネート：漆 崇博・詫間 のり子（一般社団法人 AIS プランニング）

●ノイズ電車 SAPPORO 2017

企画・制作・運営チーム：木野 哲也、永田 壘、古立 太一、山影 敏枝

●SIAF2017 市電プロジェクト×指輪ホテル

「Rest In Peace, Sapporo ～ひかりの街をはしる星屑～」

作・演出：羊屋 白玉

美術：サカタアキコ

衣裳：佐々木 青

衣裳・美術制作：岩本 直美、内倉 麻実、川村 つむぎ、KYOKO FUNAKI、小柴 裕美子、清水 小葉、Chiharu、ナガオサヤカ（プロレスリングサッガロ）、成田 真由美、Hatch、原田 ひより、yoshinao

音楽：今井 大蛇丸、鳥一匹（ムシニカマル）、鼓代 弥生、新藤 理（フリースクール札幌自由が丘学園）、スズエダフサコ（chobico）、ヨコイマウ

照明：高橋 正和

舞台監督：下澤 要

ドラマトゥルク：渡辺 たけし（蘭越演劇実験室）

出演：東谷 春奈、ANJU FUNAKI、泉、大森 佐知子、小野 弥月、亀井 健（劇団コヨーテ）、川島 靖史、川村 りこ、後藤 美紀（ピエロ大集合）、湊彦、じゃがりこ、白鷺 桜優（アート・ル・シティ）高野 吟子（劇団新劇場）、薦保 亜佑、なかつかゆり（劇団清水企画）、ナガムツ（劇団コヨーテ）、堀内 まゆみ（さっぽろ演劇研究室）、マリオネット人形師ロッカ、南沙樹、むらかみなお（デンコラ）、山田 あさこ、鹿俣 晃、NPO法人 オーク会
記録：酒井 奈菜

動画撮影：小山 赤理、箱崎 慈華

制作：糸山 裕子（アートマネージメントセンター福岡）

運営・コーディネート：漆 崇博・詫間 のり子（一般社団法人 AIS プランニング）

DJ盆踊り in さっぽろ夏まつり

共催：さっぽろ夏まつり実行委員会

プロデューサー：岸野 雄一

DJ：珍盤亭娛樂師匠

珍盤亭娛樂師匠門下：是澤凜、小柴 利男

振付師、踊り：吉田 一樹

Asian Sounds Research Presents

OPEN GATE 2017

動き続ける展覧会～An ever-changing exhibition

「何もないところから」～start from here

制作：西谷 充史、黒岩 可奈、船川 翔司、厨子 翔平、野地 真隆、横山 さおり
主催：札幌国際芸術祭実行委員会 / 札幌市、国際交流基金アジアセンター
共催：P3 art and environment
協力：北海道青少年会館 Compass、藻南公園管理事務所（藻南・石山・常盤・さくらの森グループ）、札幌市南老人福祉センター
企画：Asian Sounds Research

●「OPEN GATE の部屋」OPEN GATE archive room

動き続けた展覧会、動き続ける記録たち～The ever-changing archives of Asian

Sounds Research

協力：TOOV cafe / gallery

北海道立三岸好太郎美術館 開館50周年記念 特別展

大友良英アーカイブ お月さままで飛んでいく音＋

三岸好太郎ワークス 飛び出ス事ハ自由ダ

企画：藤原 乃里子
企画助手：小山 冴子
制作助手：安田 せひろ
主催：mima 北海道立三岸好太郎美術館
協力：山口情報芸術センター〔YCAM〕
機材協力：フォスター電機株式会社 フォステクス カンパニー

●大友良英ドキュメンタリー映画『KIKOE』上映会

監督：岩井 主税

配給：World Public

協力：シアターキノ

大風呂敷プロジェクト

札幌大風呂敷チーム：安斎 伸也、伊藤 美香、伊藤 諒哉、稲垣 恵、井下 順子、岩橋 そのみ、川尻 莉子、岸上 瑠美子、木野 哲也、工藤 賀代子、栗岡 恵子、栗岡 町子、小西 耕平、坂田 いさ子、佐藤 志保美、清水 恵子、白鳥 健志、杉本 典子、須佐 加代子、外山 あさき、高橋 恵子、高橋 房代、武田 久美子、千鳥 ふみ子、寺田 まみ、ナガオサヤカ、中嶋 愛、西村 康子、沼山 寿美枝、沼山 良明、野口 良子、野谷 節子、長谷 奈緒美、長谷川 朋美、藤本 恭子、ポール山田、まこまない大風呂敷工場、松本 みどり、村上 由貴枝、文字 英子、矢島 薫、やない 晶子、柳本 理恵、山口 理恵、ヨシナオユカリ、わたなべ ひろみ
[プロジェクトFUKUSHIMA! と各地の大風呂敷チーム]：山岸 清之進、アサノコウタ、中崎 透、小池 晶子、坂口 千秋、富山 明子、小野 慎太郎、高野 久美子、小関 英子、岸波 礼子、沼田 夕妃、渡辺 麻菜美、菅野 環、仁田 広子、穴田 百子、宮下 学、岩田 舞海、新見 永治、武藤 隆、脇田 妙子、寺島 奈歩、野手 佑子、伊藤 達信、宮崎 千明、はじまりの美術館
協力：札幌駅総合開発株式会社、株式会社北洋銀行、イオン北海道株式会社、札幌駅前通まちづくり株式会社、大丸松坂屋百貨店大丸札幌店

●中山ミシン「千鳥ふみ子」さん応援隊長就任

協力：中山ミシン商事株式会社

中島公園百物語

企画：公益財団法人北海道演劇財団、札幌市こども人形劇場こぐま座
構成・演出・音楽：斎藤 歩
人形デザイン：沢則行
人形立案・製作・出演：こぐま座こども人形劇団、やまびこ座、こぐま座パベットユーススクール
文芸・演出部：磯貝 圭子、清水 友陽、西田 薫、熊木 志保、高橋 萌永、岡部 莉奈
美術製作：中川 有子、細川 絵里子（切り絵作家）、新井 伸二（エスエスプランニング）
衣装：安尻 美代子（人形劇団ぼっけ）、アキヨ（Jellyfish）
人形操作指導：さっぽろ人形浄瑠璃芝居あしり座
照明：熊倉 英記（(株)ステージアンサンプル）
宣伝美術：若林 瑞沙（studio COPAIN）
企画制作：木村 典子（北海道演劇財団）、矢吹 英孝（こぐま座・やまびこ座）
協力：公益財団法人札幌市公園緑化協会、中島公園コンソーシアム（中島公園指定管理者）
助成：文化庁（平成29年度劇場・音楽堂等活性化事業）

さっぽろコレクティブ・オーケストラ

コンダクター：大友 良英

演出協力：藤田 貴大

演奏：さっぽろコレクティブ

プログラム・ディレクター：有馬 恵子

運営チーフ：カジタシノブ

撮影：早川 涉

演出助手：工藤 綾乃、齋藤 彦太、清水 美帆

制作助手：加納 遥香

モバイルアースオープン

企画・制作・運営：安斎 伸也
共催：公益財団法人札幌市公園緑化協会
協力：北大マルシェ2017実行委員会

I HAVE a DREAM～ひがし町パーカッションアンサンブル

企画：医療法人薪水 浦河ひがし町診療所
協力：医療法人社団楽優会札幌なかまの杜クリニック、公益財団法人北海道精神保健推進協会ここりカ・プロダクション、社会福祉法人当麻かたるべの森、社会福祉法人ゆうゆう、札幌狸小路商店街振興組合、北大マルシェ2017 実行委員会

raprap

ドラマトゥルク：斎藤 歩
照明：熊倉 英記（(株)ステージアンサンプル）
音響：景井 雅之
衣裳：岡本 囁子（アトリエ・スピカ）
舞台監督：横山 勝俊
宣伝美術：若林 瑞沙（studio COPAIN）
プロデューサー：木村 典子
制作協力：ダブルス
主催：公益財団法人北海道演劇財団
共催：NPO法人札幌座くらぶ
協力：さっぽろ天神山アートスタジオ
助成：文化庁（平成29年度劇場・音楽堂等活性化事業）

マレウレウ祭り in SIAF2017～目指せ100万人のウボボ大合唱～

撮影：STUDIO ROCCA
フライヤーデザイン：相川 みつぐ
助成：台北駐日経済文化代表処 台湾文化センター

アジアン・ミーティング・フェスティバル2017 札幌スペシャル

プロジェクト・ディレクター：dj sniff、ユエン・チーワイ
舞台監督：馬淵 仁彦
音響：Gok Sound（近藤 祥昭、松原 加奈）
照明：株式会社サンスタッフ
記録撮影・編集：藤井 光、青山 真也
ライター・インタビューアー：細田 成嗣
インタビューアー：須川 善行
制作：田村 武
主催：札幌国際芸術祭実行委員会 / 札幌市、国際交流基金アジアセンター
共催：P3 art and environment
出店：台湾料理ごとう

札幌国際芸術祭2017クロージングウィーク NMA Liveー大友良英スペシャル3days

企画：NMA

SIAF2017前夜祭 さっぽろ八月祭2017

主催：札幌駅前通地区活性化委員会（事務局：札幌駅前通まちづくり株式会社）
共催：札幌国際芸術祭実行委員会
協力：プロジェクトFUKUSHIMA!、NMA（Now Music Arts）、くう

特別協力プログラム マームとジブシー 10th Anniversary Tour（札幌公演）

主催：公益財団法人北海道文化財団
共催：公益財団法人札幌市芸術文化財団
特別協力：札幌国際芸術祭実行委員会

第68回さっぽろ雪まつり×札幌国際芸術祭2017 トット商店街

芸術監督：岸野 雄一
語り手：黒柳 徹子
出演：岸野 雄一、ジョン（犬）
音楽：海藻姉妹
影絵：戸井 安代
雪像・キャラクターデザイン：梅村 昇史
振付：東野 祥子
衣裳：桐山 阿弓
音楽協力：岡村 みどり
アニメーション協力：中村 由尚、薩摩 浩子、円香、田端 志津子
ソプラノ：安川みく
影絵人形製作：北澤 岳雄（TASKO inc.）
小道具製作：加藤 小雪（TASKO inc.）
舞台監督：寅川 英司
舞台監督助手：田中 千鶴
照明：高田 政義（RYU）
音響：小内 弘行（(株)ジョイサウンドプロモーション）
映像：竹内 康晃（Take One）、杉山 慎一郎（SphinkS）
ミックス：葛西 敏彦
録音：馬場 友美
効果音：佐藤 咲月
制作：小森あや（TASKO inc.）
撮影：アキタヒデキ（写真）、STUDIO ROCCA（動画）
協力：株式会社ブリズム、RYU、TASKO inc.
雪像制作：さっぽろ雪まつり大雪像制作委員会 第1雪像制作部会
主催：さっぽろ雪まつり実行委員会

●札幌ルーブライン

監修：岸野 雄一
技術協力：クワクボリョウタ
音楽：海藻姉妹
製作協力：木村 匡孝、北澤 岳雄、工藤 幸平、小森 あや（TASKO inc.）
アシスタント：浅野 陽子、櫻田 純菜、渡辺 葉
撮影：アキタヒデキ（写真）、STUDIO ROCCA（動画）

SIAF グルメガイド

コラボ参加店舗：
【美食レストラン】オーベルジュ・ド・リル サッポロ、フレンチレストラン カザマ、グラン、サヴァール、創作フランス料理レストラン ヌーベル プース、ラ・サンテ、レストランテ・アリ、オステリア イルソルト、レストランテ イル・チェントロ ひらまつ、カブリ カブリ、日本料理 とらや、海鮮中華 宮の森れんげ堂、バルコ札幌
【スイーツ】きのとや（大丸店、丸井今井店）、もりもと ミュンヘン大橋店、ケーキハウス ステラ・マリス、パティスリーアンシャルロット、ベルバルク、テイクアウトショップ バニエ
【カフェ・喫茶店】宮越屋珈琲 南2条店、板東珈琲、寿珈琲、カフェ・ド・ノール、ワールドブックカフェ、元気カフェ宮田屋、宮田屋（清田本店、東苗穂店、大麻店、白石店、サッポロファクトリー店、豊平店、美しが丘店、清田ダイイチ店）
【シメパフェ】ミライストカフェ & キッチン、パフェテリア バル、ムジカホールカフェ、ノイモンド オーガニック カフェ、夜パフェ専門店 ななかも堂、パフェ、珈琲、酒 佐藤、ダイニング&スイーツ シナー
【BAR】BAR紺野、バー スターズ2003、糸すぶり BAR ESPRIT、バー トラディション、ショットバー ヴェッキオ、BAR一慶、サントリーバー アヴァンティ、サントリーバー アヴァンティファイブ、ショットバー ビーアール
【その他】居酒屋 てれ屋

SIAF2017にご参加・ご協力くださった全ての皆さまへ、深く感謝申し上げます。

SIAF2017企画体制

●ゲストディレクター

大友 良英

●エグゼクティブアドバイザー

沼山 良明

●企画メンバー

漆 崇博、上遠野 敏、木野 哲也、坂口 千秋、佐藤 直樹、中島 洋、端 聡、
細川 麻沙美、マユンキキ〈マレウレウ〉、宮井 和美、藪前 知子

スタッフ

●コーディネーション

雨森 信、岡田 理絵、小野 朋子、小山 冴子、カジタシノブ、斎藤 ふみ、佐賀井 真哉、
佐野 由美子、柴田 直美、高橋 喜代史、富田 哲司、永田 壘、西 翼、松本 知佳

●アーキテクト

丸田 知明

●テクニカルエンジニア

石田 勝也、金築 浩史、小柴 一浩、小町谷 圭、船戸 大輔

●デザイン

白井 宏昭、巢内 直美

●広報PR

山岸 奈津子 (Climate PR)

メインビジュアル・シンボルマーク

佐藤 直樹、Asyl (中澤 耕平、菊地 昌隆、遠藤 幸)

ウェブサイト作成

Asyl (竹田 大純)、黒川 崇史

首都圏PR

TAIRA MASAKO PRESS OFFICE

広報協力

hello! HOKKS (株式会社エフエム北海道 (AIR-G'))
(2016年5月～2017年10月まで、番組内でSIAFのPRコーナーを放送)

記録撮影

スチール：小牧 寿里、クスメエリカ、藤倉 翼
(本誌掲載写真を含む)

ムービー：藤倉 翼、早川 渉、株式会社 seven Swell

イベント運営

プラスポイント株式会社

編集

PILOT PUBLISHING (岩村 良介)